

奈木4号墳
柳生川南部地区試掘調査



2001年3月

豊橋市教育委員会

な
奈

ぎ
木

よん
4

ごう
号

ふん
墳

例 言

1. 本文は、豊橋市嵩山町字奈木9番地において個人住宅建設工事に伴い、事前に実施された国庫・県費補助事業による奈木4号墳発掘調査の報告書である。調査期間は平成12年9月18日～同年9月27日で、調査面積は50㎡である。
2. 発掘調査は、豊橋市教育委員会が行い、岩瀬彰利（教育部美術博物館文化財係）が調査を担当した。
3. 発掘作業については、土地所有者である高藤長夫氏をはじめ、地元の方々のご協力を得た。また、報告書作成にあたり、遺物の実測・トレース等については平賀静子の援助を受けた。写真撮影は岩瀬が行った。
4. 本書の執筆に際し、竪穴住居については佐藤由紀男（浜松市博物館）、鈴木とよ江（西尾市教育委員会）、前田清彦（豊川市教育委員会）、蔭山誠一・永井宏幸（愛知県埋蔵文化財センター）、石器の石質同定は家田健吾（豊橋市自然史博物館）、古墳については岩原剛（豊橋市教育委員会）、須恵器については小林久彦（豊橋市教育委員会）の各氏からご教示を頂いた。記して感謝の意を表す次第である。
5. 本書の執筆・編集は岩瀬が行った。
6. 本書に使用した方位は磁北である。遺構・遺物実測図のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
7. 本調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

目次

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

- 1. 遺跡の立地 1
- 2. 歴史的環境 2

第2章 調査の経過

- 1. 調査に至る経過 4
- 2. 調査の方法 5

第3章 墳丘と横穴式石室

- 1. 古墳の現状 6
- 2. 横穴式石室 8

第4章 検出された遺構と遺物

- 1. 古墳に伴う遺構・遺物 9
- 2. 古墳以外の遺構・遺物 15
- 3. 表土出土の遺物 19

第5章 まとめ

- 1. 弥生時代前期水神平式期の竪穴住居について 21
- 2. 豊川流域における弥生系磨製石斧と条痕文系集団について 23
- 3. 奈木4号墳について 24
- 4. 奈木古墳群について 25

挿 図 目 次

第1図	奈木4号墳位置図 (1/2,500)	1
第2図	奈木4号墳周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
第3図	調査区位置図 (1/200)	4
第4図	墳丘残存部側面図 (1/40)	6
第5図	墳丘残存部測量図 (1/100)	7
第6図	調査区全体図 (1/40)	10
第7図	周溝実測図 (1/40)	11
第8図	周溝遺物等出土状況図 (1/20)	12
第9図	周溝出土遺物実測図 (1/3)	14
第10図	竪穴住居断面図 (1/40)	15
第11図	竪穴住居実測図 (1/40)	16
第12図	S B-2 及び S B-2 内攪乱部出土遺物実測図 (1/2)	18
第13図	表土出土遺物実測図 (1/3)	20
第14図	S B-2 出土炉縁石実測図 (1/5)	21
第15図	S B-2 推定復元図 (1/100)	22
第16図	奈木4号墳墳丘範囲推定図 (1/300)	24

表 目 次

第1表	出土遺物観察表	8
第2表	奈木古墳群一覧表	26

写 真 図 版 目 次

図版1-1	奈木4号墳上空写真	2	奈木4号墳遠景 (南から)
2-1	奈木4号墳近景 (南から)	2	墳丘残存部 (南上方から)
3-1	墳丘残存部 (南から)	2	墳丘残存部 (北から)
4-1	墳頂部 (東から)	2	奥壁が撤去された横穴式石室 (東から)
3	奥壁が撤去された横穴式石室 (北東から)	4	露出した天井石 (東から)
5	積み上げられた天井石 (南東から)	6	放置された奥壁 (東から)
5-1	調査区全景 (南から)	2	調査区全景 (南から)
6-1	S B-1・2 全景 (南西から)	2	S B-1・2 全景 (南東から)
7-1	S B-1・2 ベルト部 (南西から)	2	S B-1・2 の切り合い (南西から)
3	断面で確認された S B-2・P 1 (北から)	4	炉縁石出土状況 (北から)
8-1	周溝全景 (南から)	2	周溝全景 (西から)
3	周溝全景 (東から)		

- | | | | |
|------|------------------------|---|------------------|
| 9-1 | 周溝西端遺物出土状況（北西から） | 2 | 周溝西端遺物出土状況（南東から） |
| 3 | 周溝東端遺物出土状況（南西から） | 4 | 周溝東端遺物出土状況（東から） |
| 10-1 | 調査のようす | 2 | 奈木1号墳全景（南から） |
| 3 | 奈木1号墳石室開口部（南から） | 4 | 奈木1号墳石室内部（南から） |
| 5 | 奈木3号墳奥壁（南から） | 6 | 奈木5号墳全景（北から） |
| 7 | 奈木6号墳全景（北西から） | 8 | 奈木8号墳全景（南から） |
| 11-1 | 奈木9号墳全景（南から） | 2 | 奈木10号墳全景（南から） |
| 3 | 奈木10号墳羨門（南から） | 4 | 奈木11号墳全景（南西から） |
| 5 | 奈木12号墳全景（南から） | 6 | 奈木13号墳全景（南から） |
| 7 | 奈木14号墳全景（南から） | 8 | 奈木15号墳全景（西から） |
| 12 | 周溝出土遺物 | | |
| 13-1 | S B-2 及び S B-2 内攪乱出土遺物 | 2 | 表土出土遺物 |

第1章 遺跡の立地と歴史的環境

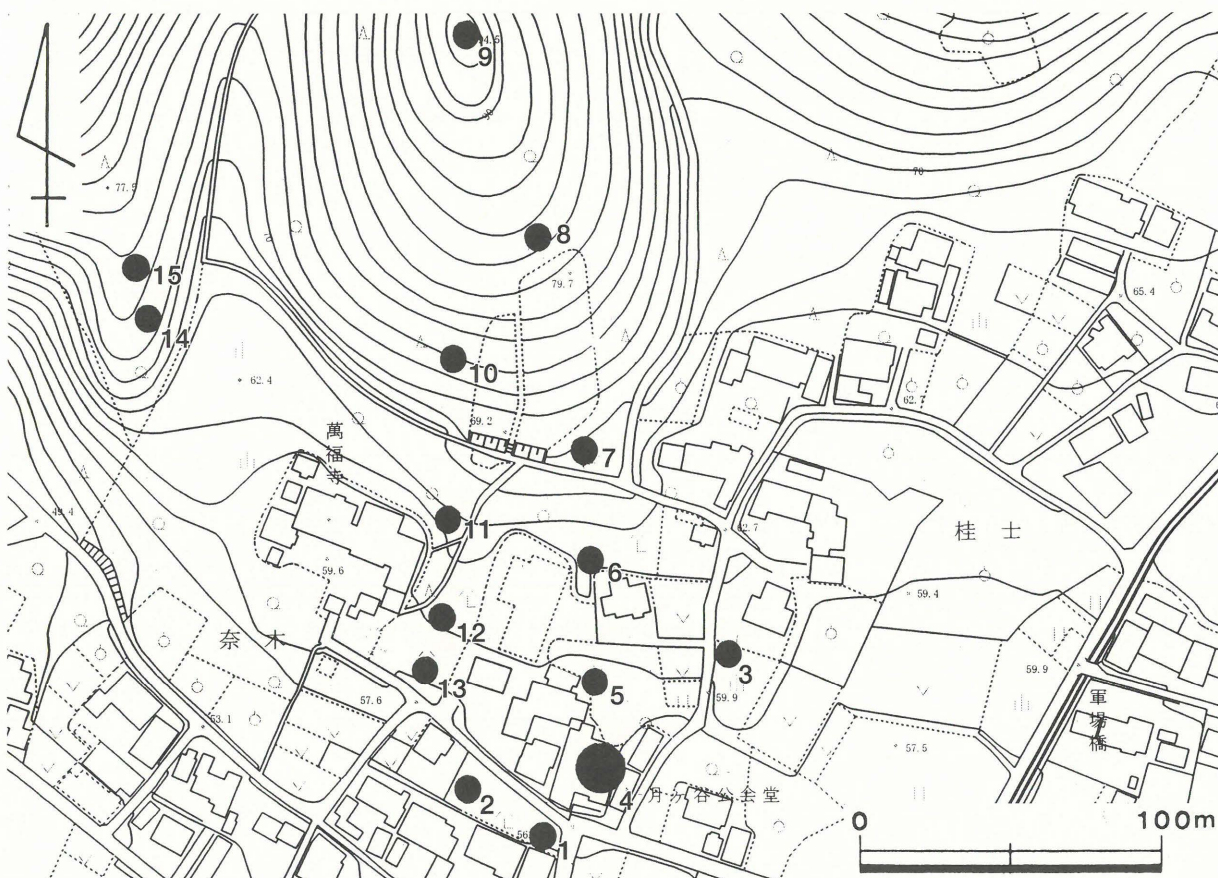
1. 遺跡の立地 (第1図)

奈木4号墳は豊橋市嵩山町字奈木9番地に所在する円墳である(第1図)。古墳の立地については、前回の報告書で詳細に検討(註1)されており、それを参考に述べよう。

豊橋市の北東部には、秩父古生層のチャート、砂岩、輝緑凝灰岩からなる標高250m~400mの弓張山系の山々が連なっている。この弓張山系は、赤石山脈の光岳から派生している尾根の最南端にあたり、弓張山系主稜からは北西方向へ尾根が多数延びている。これらの尾根は、北西に向かうほど標高が低くなり、端部は中央構造線系の断層によって絶ち切られて崖状をなしている。各尾根間には豊川支流の河川が流れて浅い谷底平野を形成しており、西側を流れる豊川の中位段丘面に連続している。山地と平野の境界には、断層に起因する幅の狭い山麓緩斜面が各所に見られる。

奈木4号墳のある嵩山町は豊橋市の中心から北東に位置し、弓張山系から延びる二つの尾根に挟まれた谷底平野に立地する。町の北側には、弓張山系主稜から分岐した東西方向に延びる尾根があり、標高446mをピークに西に向かって高度を下げ、奈木古墳群背後では約300mを測る。この尾根の南側は急傾斜地であるが、尾根と谷底平野の境界付近には標高50m~70mにかけて幅の狭い山麓緩斜面があり、奈木古墳群の大半はこの緩斜面上に立地している。奈木4号墳は、緩斜面地でも末端に近い位置に立地し、標高は58mを測る。この部分は、古墳群でも南端に近い場所である。

註1 水野季彦 1993 「第2章 豊橋市北部の地形と古墳の立地」『古墳測量調査(Ⅰ)』豊橋市教育委員会



第1図 奈木4号墳位置図 (1/2,500)

2. 歴史的環境 (第2図)

奈木4号墳は15基からなる奈木古墳群に属す。この地域は群集墳の多いところで、この他に瀬戸古墳群、桂土古墳群、山軍馬古墳群、荒木古墳群などが集中している。現在豊橋市内では遺跡詳細分布調査が6カ年計画で行われており、踏査地区からは多数の新発見の遺跡が見つかっている。しかし、奈木古墳群のある嵩山町は、まだ分布調査が行われていない。ここでは、奈木古墳群を除く群集墳を中心に現段階での周辺の遺跡概要を述べるが、分布調査によって新発見の遺跡や古墳が発見されることにより内容が変わる可能性がある点をご了承いただきたい(第2図)。

縄文時代の遺跡には、嵩山蛇穴遺跡(1)、立岩遺跡(2)、枇杷山洞窟遺跡(3)などの早期の洞窟遺跡や開地遺跡である前期の北山遺跡(4)が知られている。嵩山蛇穴遺跡は昭和16~17年、22年の4回にわたり発掘調査が行われており、現在では国の史跡に指定されている。開口部は高さ1.3m、幅3.5mで、奥行きは70m程の洞窟である。開口部前面に平坦地があり、この平坦地と開口部付近から炉跡や遺物が出土している。遺物には草創期の表裏押圧縄文土器や早期の押型文土器などの縄文土器をはじめ、石器、骨角器やハマグリ、シカなどの動物遺体が見られる。

弥生時代の遺跡は見つかっておらず、次の古墳時代の遺跡も、集落址は確認されていない。しかし、群集墳は多数見つかっており、さながら墓域としての感がある地域である。群集墳としては、馬越北山古墳群(5)、瀬戸古墳群(6)、桂土古墳群(7)、山軍場古墳群(8)、荒木古墳群(9)、角庵古墳群(10)、北山古墳群(11)が知られている。

馬越北山古墳群は、丘陵の西端南斜面付近に位置し、円墳20基が確認されている古墳群である。このうち調査が行われているのは宮西古墳のみである。宮西古墳(12)は、1979年に時習館高校によって石室内の清掃発掘が行われている。古墳は径12mの円墳で、石室形態は単室・疑似両袖型の横穴式石室であり、6世紀後葉の築造と考えられる。出土遺物には須恵器(坏蓋・坏身・提瓶・長頸壺・甕)、大刀、短刀鏝、鉄鏃、弓飾り金具、刀子、耳環、勾玉、丸玉、棗玉がある。

奈木古墳群と同じ丘陵の南斜面、緩斜面には瀬戸古墳群、桂土古墳群、山軍場古墳群、荒木古墳群、角庵古墳群、北山古墳群が点在している。このうち瀬戸古墳群は15基の円墳、桂土古墳群は11基の円墳、山軍場古墳群は7基の円墳、角庵古墳群は6基の円墳で構成されているが、調査が行われていないため詳細は不明である。

荒木古墳群は、17基の円墳からなる群集墳である。このうち荒木2号墳(13)は、東三河自動車検査場建設に伴い豊橋市教育委員会の委託で愛知大学が1967年に発掘調査を行っている。調査によって古墳は直径約10mの円墳で、外部施設として周溝と外護列石が存在することがわかっている。石室は疑似両袖型・奥窄り形の横穴式石室で、開口方向はN-15°-Wである。古墳からは須恵器(坏蓋・坏身・高坏・フラスコ瓶・平瓶・甕・甕)、鉄器、耳環等が出土し、築造時期は7世紀中葉のものと推定されている。

北山古墳群は最奥に位置し、7基の円墳からなる。1953年に北山2号墳(14)から須恵器(横瓶、提瓶、平瓶、高坏・甕・坏)、直刀、刀子、鉄鏃、丸玉、切子玉、管玉が出土している。

古代の遺跡は見つかっていないが、中世の遺跡では西郷氏の居城であった月ヶ谷城(15)や市場城

(16) があり、月ヶ谷城の下屋敷であった下角庵遺跡 (17) がある。下角庵遺跡は、荒木2号墳と同時に調査され、条痕文土器、中世陶器や五輪塔などが出土している。

参考文献 瓜郷遺跡調査会 1968 『萬福寺古墳』



第2図 奈木4号墳周辺遺跡分布図 (1/25,000)

第2章 調査の経過

1. 調査に至る経過 (第3図)

豊橋市嵩山町字奈木8番地に在住する高藤長夫氏より、平成12年8月に市教育委員会美術博物館に住宅を建て替える旨の事前の相談があった。住宅は牛舎の一部を撤去し、その跡地に建設する予定で、着工は平成12年11月頃とのことであった。高藤邸には敷地内に奈木4・5・6・12号墳が所在しており、1987年には作業小屋建設に伴って古墳の一部調査を行っている。市教育委員会では、今回の宅地建設予定地が奈木4号墳の範囲に含まれる可能性が高いことから、市教育委員会宛に「埋蔵文化財所在の有無及びその取扱いについて」の照会を提出するよう指導した。そして、同年8月30日に高藤氏の照会に基づき、市教育委員会では現地を実見し、奈木4号墳がかつての牛舎建設で半分以上が壊されており、石室の石材が露出して一部が崩落寸前であることを確認した。

住宅建設予定地は、4号墳残存墳丘から2m程離れていたが、予定地内は完全に古墳の範囲に含ま



第3図 調査区位置図 (1/200)

れており、周溝が残存している可能性も高かった。このため同日、市教育委員会では高藤氏に古墳が所在し、文化財保護法第57条の2に基づき愛知県教育委員会宛に届出が必要であることを回答した。

その場で、高藤氏と再度協議し、宅地建設予定地は当該地区しかないため、工事着工前に発掘調査を行うこととし、住宅建設部分で古墳に係る50㎡について発掘調査を行うことで合意した。工事までに期間がないため同日中に埋蔵文化財発掘の届出を県教育委員会宛に提出し、後日県教育委員会から発掘調査の指示が出された。これに基づき市教育委員会が発掘調査の主体となり調査を行った。調査費用は個人住宅のため国庫・県費補助事業を適用し、表土剥ぎや水道等の利用については、高藤氏からご協力を得た。

現地調査は平成12年9月18日～9月27日にかけて行った。調査区の位置は第3図の通りである。調査は新たに着工する建物側面を基準軸にして任意の基準点を設定したが、調査区が狭いためグリッドを設定していない。表土等の遺物は調査区内で一括して取り上げている。

2. 調査の方法

調査は、廃土置き場の関係で宅地建設予定の古墳に係る部分、9m×6m程度と狭い範囲で行った。集落址などの通常調査の場合、市教育委員会では10m四方のグリッドを設定して調査を行っている。しかし、今回の調査区は範囲が各辺で一辺10mに満たないため、あえてグリッドを設定しなかった。調査区の基準点及び方向も建物軸に合わせるといように任意で設定した。

墳丘は既に削り取られ、調査地点は整地されており平坦になっていた。だが調査区は山裾の緩斜面地であるため、墳丘側は表土下約5cmのところ在地山面が存在していたが、裾側では表土下約1mの深さで地山面に達した。ただし、調査区内は牛舎造成及び撤去時に重機によって殆ど全て地山面まで掘削して整地されているため、地山表面にはバックホーの爪痕が一面に見られた。このため墳丘土及び旧表土等で残存している箇所は全くなかった。また地山面もバックホーのバケットによって深く掘られた部分は攪乱としたが、表面に爪跡が残る程度のものは残存しているものとして扱った。検出された地山面は黄褐色粘土層であり、遺構検出はその地山面で実施している。なお、作業順序は以下のとおりである。

1. 重機を使用して表土剥ぎを行う。
2. 調査区を設定し、基準点を設定する。
3. 人力で遺構検出・掘削を行い、遺物を取り上げる。
4. 必要に応じて遺物出土状況図などの関係図面を作成したり、遺構写真を撮影する。
5. 遺構を完掘させ、遺構全体図を完成させる。
6. 調査区内の清掃を行い、全体写真を撮影する。
7. 墳丘残存部を測量し、露出している石室石材も記録する。

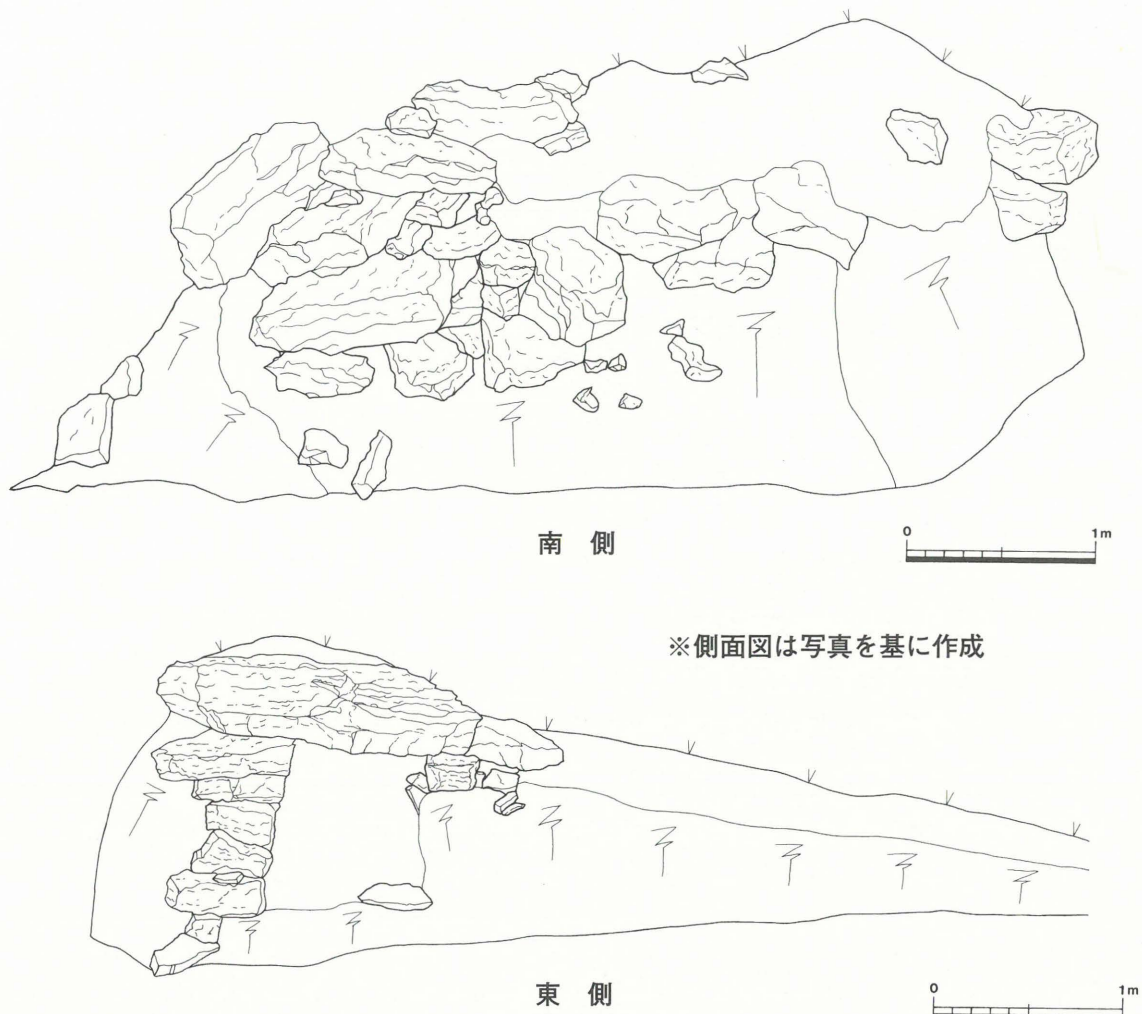
今回の調査では、表土剥ぎの段階で攪乱が著しいことが判明した。だが、竪穴住居や古墳周溝などの遺構が比較的よく残存していた。また予想に反して中世の遺物が若干出土したが、遺構は検出できなかった。

第3章 墳丘と横穴式石室

今回の調査は、古墳の墳丘が既に削平されている地点で行われた（第3図）。このため、本来は墳丘の範囲内に相当するが、墳丘の規模や盛土の堆積状況は把握できない状況であった。残存している墳丘は石室付近まで削られているため、石室の石材や盛土が崩れかけていた。このままでは、墳丘残存部の崩壊が進行する恐れもあったため、発掘調査と併せて墳丘残存部の測量も行うこととした。測量調査に際しては、測量を円滑にするために草木の伐採は行ったが、墳丘残存部が基本的に保存される部分なので掘削等は行っていない。以下に墳丘残存部の現状と、露出している横穴式石室の状況を記載するものである。

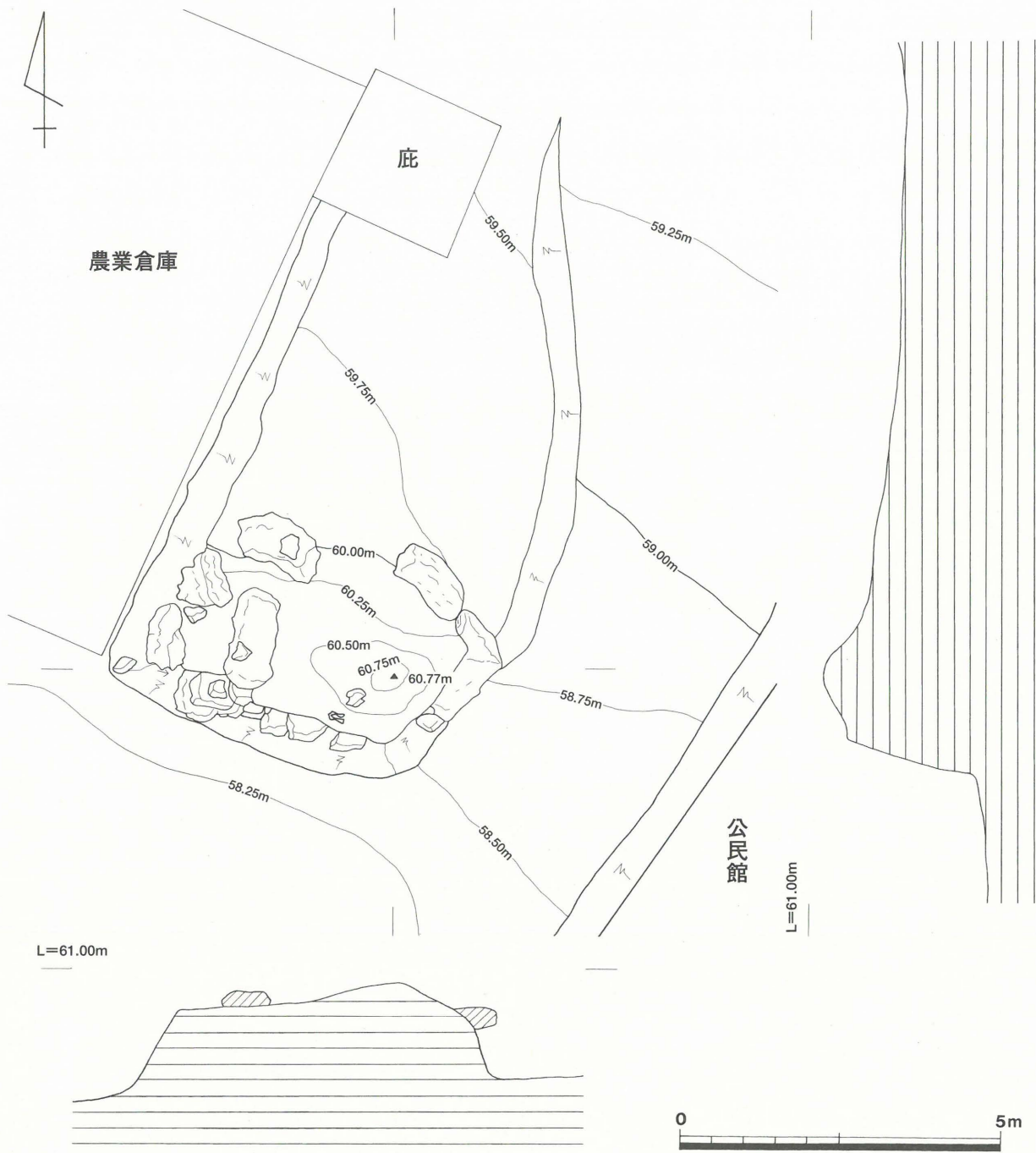
1. 古墳の現状（第4・5図）

古墳の墳丘は、牛舎、倉庫や道の建設によって壊されており、石室中心部を含めた約1/6程の墳丘しか残っていない。調査区部分は既に墳丘が取り除かれており、北側に墳丘残存部があるのみ



第4図 墳丘残存部側面図（1/40）

である。第4図は、墳丘残存部の現状（未削平部分）を南側側面と東側側面から見通した図である。墳丘残存部の南側には石室石材が露出しており、一部は崩れかけている。東側は奥壁石材が撤去されており、断面に石室の横断面形が露出している。墳丘残存部を測量（第5図）すると、幅5.7m、長さ10.6mの長方形気味の形をしており、南西端に墳頂部が位置する。最高点の標高は60.77mを測り、墳丘残存部は石室の部分のみ高く、そこから急激に下がり、その後北側へ緩やかに傾斜している。墳頂部と北側墳裾の高低差は1.3m、墳頂部と南側削平部分は2.3mを、それぞれ測っている。墳丘残存部表面には壊された石室の石材が積み上げられていたが、葺石と思われる礫は確認できなかった。だが後述するが、周溝内から葺石と思われる約30cm大の礫が多数出土していることから、墳丘には葺石が葺かれていたことは間違いないものと思われる。



第5図 墳丘残存部測量図 (1/100)

2. 横穴式石室 (第4図)

石室は、残存部の状況から横穴式石室であることがわかっている。石室の羨道部付近及び奥壁部分は牛舎や道路建設の際に既に破壊されていた。石室残存部は天井石が全て残っていたが、内部は土砂によって埋まっており、ようすを伺い知ることはできなかった。石室の残存長は4.9mである。残存幅は建物により床面での計測はできず天井面での側壁幅の計測値であるが、奥壁側で1.1m、羨道部側では1.0mを測った。この幅から割り出した石室開口方位は、N-84°-Wとほぼ西方向に開口している。石室の側壁は、露出している石材から推定すると、長さ0.5m~1mの石材が用いられているようである。側壁は、ほぼ5段の石積みが確認でき、南側側壁の傾斜角度は89°と内傾している。確認できた側壁の比高は約1mであったが、側壁基部は埋没している可能性が高く、石室内の正確な高さは不明である。奥壁はすでに撤去されていたが、地主の高藤氏の話では、奥壁は一枚岩ではなく三個の石材が積んであったそうである。この分割された奥壁である点から、石室は萬福寺古墳と同様に、平面形で羨道部と玄室部が区別されない無袖型のものである可能性が高い(註1)。石室天井石は、長さ1.8m、幅0.7m、厚さ0.5m程の一枚石が用いられており、4個が露出しているが他は墳丘内に埋没している。おそらく、石室残存部には7個の天井石が残っているものと推定される。以上のように石室は、ほぼ玄室部に相当する箇所が良好に残存していると思われる。

註1 岩原 剛氏にご教示を得た。

第1表 出土遺物観察表

遺物NO.	遺構	器種・分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整	備考
9-1	周溝西端	S 坏蓋	12.6	(3.6)			密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、外面回転ナデ・回転ヘラケズリ	
2	周溝西端	S 坏蓋		(1.6)			密	良好	灰色	内面回転ナデ、外面回転ナデ・回転ヘラケズリ	
3	周溝西端	S 坏蓋					密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
4	周溝西端	S 坏蓋		(3.6)			密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、外面回転ヘラケズリ	
5	周溝西端	S 坏身	11.4	(4.2)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
6	周溝西端	S 坏身					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
7	周溝西端	S 坏身					密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
8	周溝西端	S 坏身					密	良好	灰色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
9	周溝西端	S 坏身	13.4	(4.2)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
10	周溝西端	S 坏身	12.0	(3.5)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部回転ヘラケズリ	
11	周溝西端	S 高坏	13.2	(3.9)			密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、外面回転ナデ・回転ヘラケズリ	
12	周溝西端	S 高坏		(8.7)	11.0		密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、外面回転ナデ・回転ヘラケズリ	
13	周溝西端	S 高坏		(6.7)			密	良好	灰色	内面回転ナデ、外面回転ナデ・回転ヘラケズリ	
14	周溝西端	S 高身		(1.6)			密	良好	灰色	内面回転ナデ、外面回転ナデ・回転ヘラケズリ	
15	周溝西端	S 高坏		(3.2)			密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
16	周溝西端	S 高坏		(5.0)			密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ	
17	周溝西端	S 高坏		(4.4)			密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
18	周溝西端	S 高坏		(5.4)	10.6		密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
12-1	SB-2	J 甕					密	良好	茶褐色	内面ナデ、外面半截竹管による条痕文	
2	SB-2内SK-2	J 壺					密	良好	淡茶褐色	内面摩滅、外面条痕文・波状文	
3	SB-2内SK-2	R 剥片				長さ2.6、幅1.5、	厚さ1.1、		石材黒曜石		
4	SB-2内攪乱	R 磨製石斧				長さ6.4、幅4.1、	厚さ1.3、		石材塩基性岩		
13-1	表土	S 長頸壺	9.0	15.3	4.0		密	良好	灰色	内面回転ナデ、外面回転ナデ・静止ヘラケズリ・沈線	
2	表土	S 短頸壺					密	良好	灰色	内外面回転ナデ	
3	表土	S 甕		(6.2)			密	良好	淡灰褐色	内面回転ナデ、外面沈線・刺突、円孔有り	
4	表土	S 甕					密	良好	淡灰色	内面回転ナデ、外面タタキメ	
5	表土	P 碗		(2.6)	7.4		密	良好	淡灰色	内外面回転ナデ、底部糸切り痕	
6	表土	P 碗					密	良好	淡灰褐色	内外面回転ナデ、底部糸切り痕	
7	表土	P 片口鉢					密	良好	灰褐色	内外面回転ナデ、片口有り	
8	表土	T 鉢					密	良好	淡褐色	内外面回転ナデ	
9	表土	T 摺鉢					密	良好	赤褐色	内外面回転ナデ、鉄釉	
10	表土	H 内耳鍋	21.0	(4.6)			密	良好	淡褐色	内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・ハケメ	

*J-条痕文土器 S-須恵器 P-中世陶器 T-陶器 H-土師器 R-石器
 法量の単位はcm、()は残存数値。底径には、脚部径や台部径を含む。

第4章 検出された遺構と遺物

今回の調査では古墳の周溝、竪穴住居、土壙などの遺構が検出されている（第6図）。ここでは各遺構を古墳に伴う遺構と古墳以外の遺構に分け、表土も含めた出土遺物も併せて記載する。記載にあたって竪穴住居はS B、土壙はS K、建物等の柱穴はPとそれぞれ表記する。なお、規模等の数値は遺構検出面（地山面）で測った数値である。調査区内は墳丘が削平されており、地山上面まで重機によって攪乱されていた。調査区内の層序については、基本的に表土（攪乱土）の下は地山（黄褐色粘質土）である。

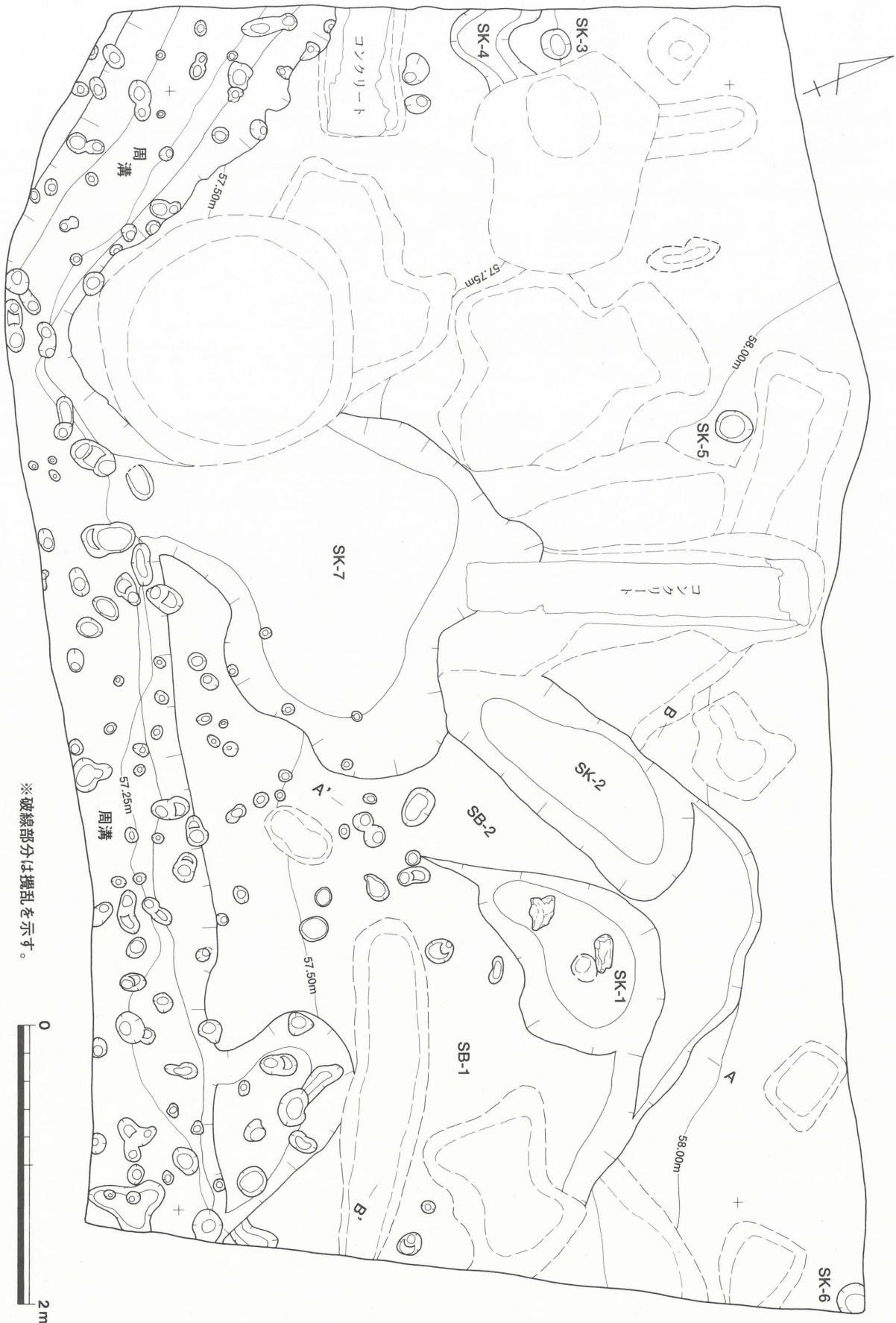
1. 古墳に伴う遺構・遺物（第7～9図）

調査区の南端に溝が1条巡っている。溝はこれ以外には検出されておらず、また墳頂部を中心に巡っているため周溝と判断した。検出できた古墳に伴う遺構は周溝のみである。なお、古墳に伴うと考えられる須恵器でも表土出土のものは、「2. C. 表土出土の遺物」に記載している。

A. 周溝（第7・8図）

周溝（第7図）

周溝は調査区南端を巡っており、西側では周溝両端が検出されたのに対し、中央から東側は周溝外側が調査区外になり、内側の落ち込みのみしか検出できなかった。周溝の規模は長さ9.2m、最大幅1.3m、最小幅は0.7mであった。周溝の幅、深さ、断面形は地点によって大きく異なる。A-A'ラインでは幅1.2m、深さ0.4m、断面形は底が丸い碗状をなすが、B-B'ラインでは幅は0.7mと狭くなり、深さは0.3m、断面形は底部にやや平坦面をもつ箱形というように変化している。この形状もC-C'ラインになると更に幅0.8m以上、深さは0.2mと浅くなり、断面形は底面が水平な逆台形に近くなるものと思われ、D-D'ラインでも同様な形状で幅0.8m以上、深さは0.2mの断面形は逆台形をなす。周溝東端には長径1.2m、短径1.0m、深さ0.2m程の土壙状の張り出しが墳丘内に延びていた。周溝より若干底面が高いが、埋土の違いは確認できていないことから周溝に付属するものと考えた。ただ、この張り出しが何を意味するのか解釈はできない。周溝内からは径20cm、深さ10cm程の土壙群が検出されている。これら土壙群は、周溝外の東側墳丘内にも及んでおり、このうちの1基からは周溝内に投棄された須恵器と同一個体の破片が出土している。このことから、周溝が巡らされた時点でこれらの土壙は存在していた可能性も考えられる。ただ、これら土壙群は規模・配置に規則性がなく、その性格は不明で、周溝との関係もわからない。周溝埋土及び周溝内土壙群の埋土は黒褐色砂質土と同じであった。周溝の埋没時期は、後述する出土遺物から考えると6世紀後葉と思われる。

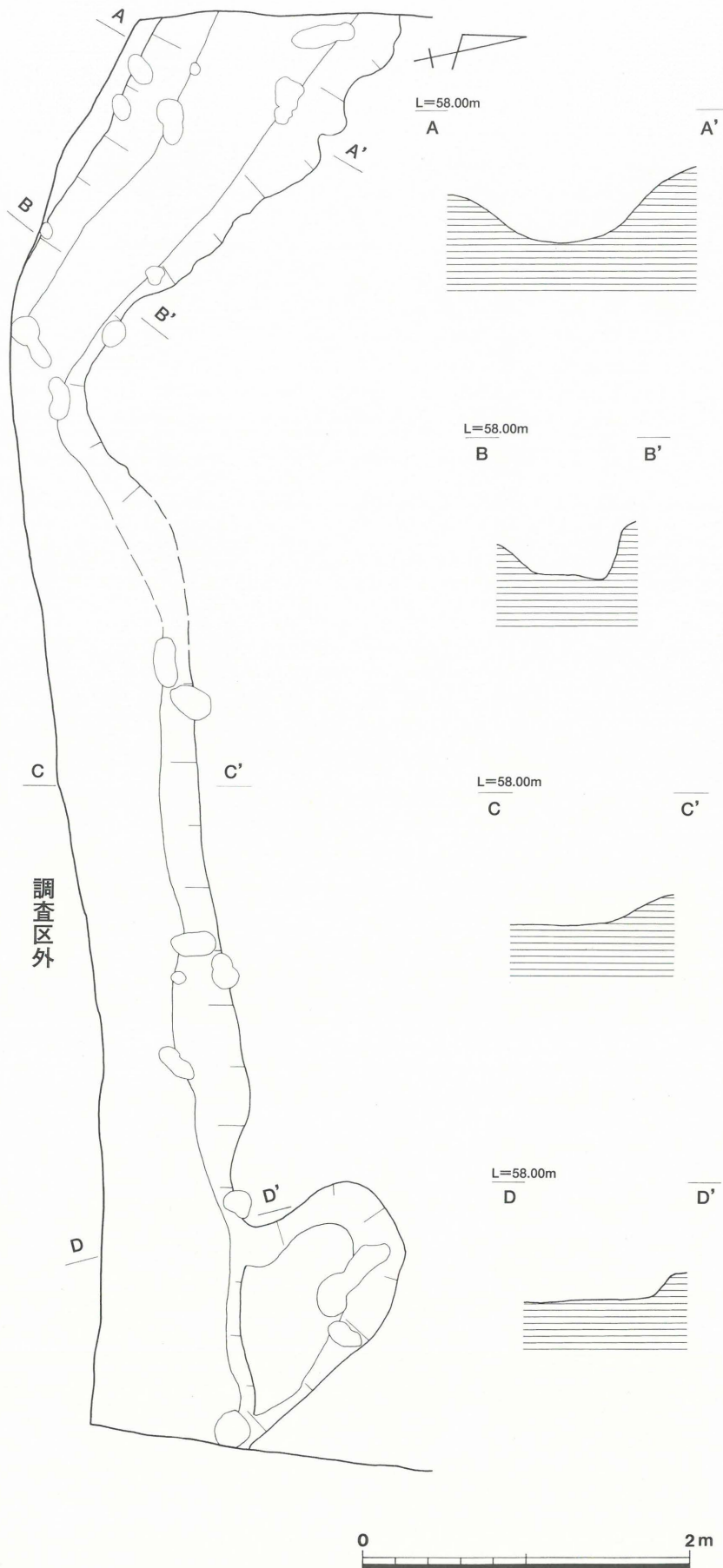


第6図 調査区全体図 (1/40)

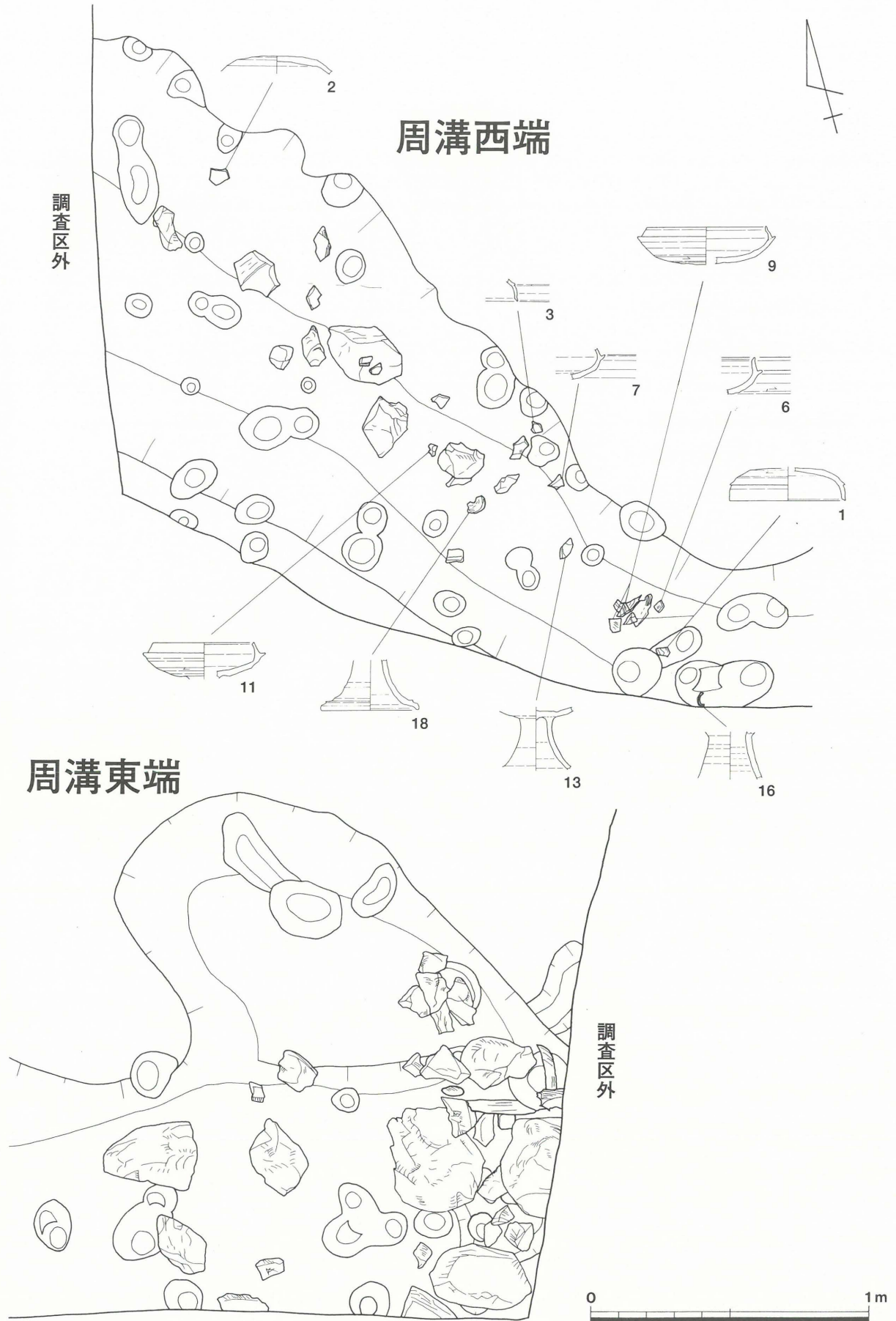
周溝内遺物等出土状況(第7図)

周溝内からは西端付近で須恵器が、東端付近で礫群が出土している。須恵器の出土状況(第8図)であるが、周溝西端では須恵器の坏身・坏蓋・高坏が端部から2.5mの範囲で散在した状況で出土している。須恵器の出土位置は全体的に周溝中央部の底面から10cm程上から多く出土しており、周溝埋土は分層ができてはいないが、周溝が若干埋まっている状況で廃棄されたものと考えられる。須恵器が出土した地点は、推定した石室開口部中軸線から3.7m~5.9mの位置に相当し、追葬時に掻き出してこの辺りまで廃棄していたことが想定できる。また須恵器分布範囲内から15cm~30cm大の礫も数個出土しており、石室閉塞石に用いられた礫も若干は同時に廃棄されたものと思われる。

周溝東端では、端部から2mの範囲内から礫が出土しており、遺物では須恵器片が1点のみ出土している。礫は長さ15cm~40cmの角礫で、周溝東端部では重なり合うように、端部から2m程離れたところでは散在して検出されている。これらの礫は、底面から5cm~10cm程の高さで出土しており、これらも溝が若



第7図 周溝実測図 (1/40)



第8図 周溝遺物等出土状況図 (1/20)

干埋まってから落ち込んだものと思われる。おそらく、墳丘にあったと考えられる葺石などの石材が転げ落ちて堆積したものと推定される。

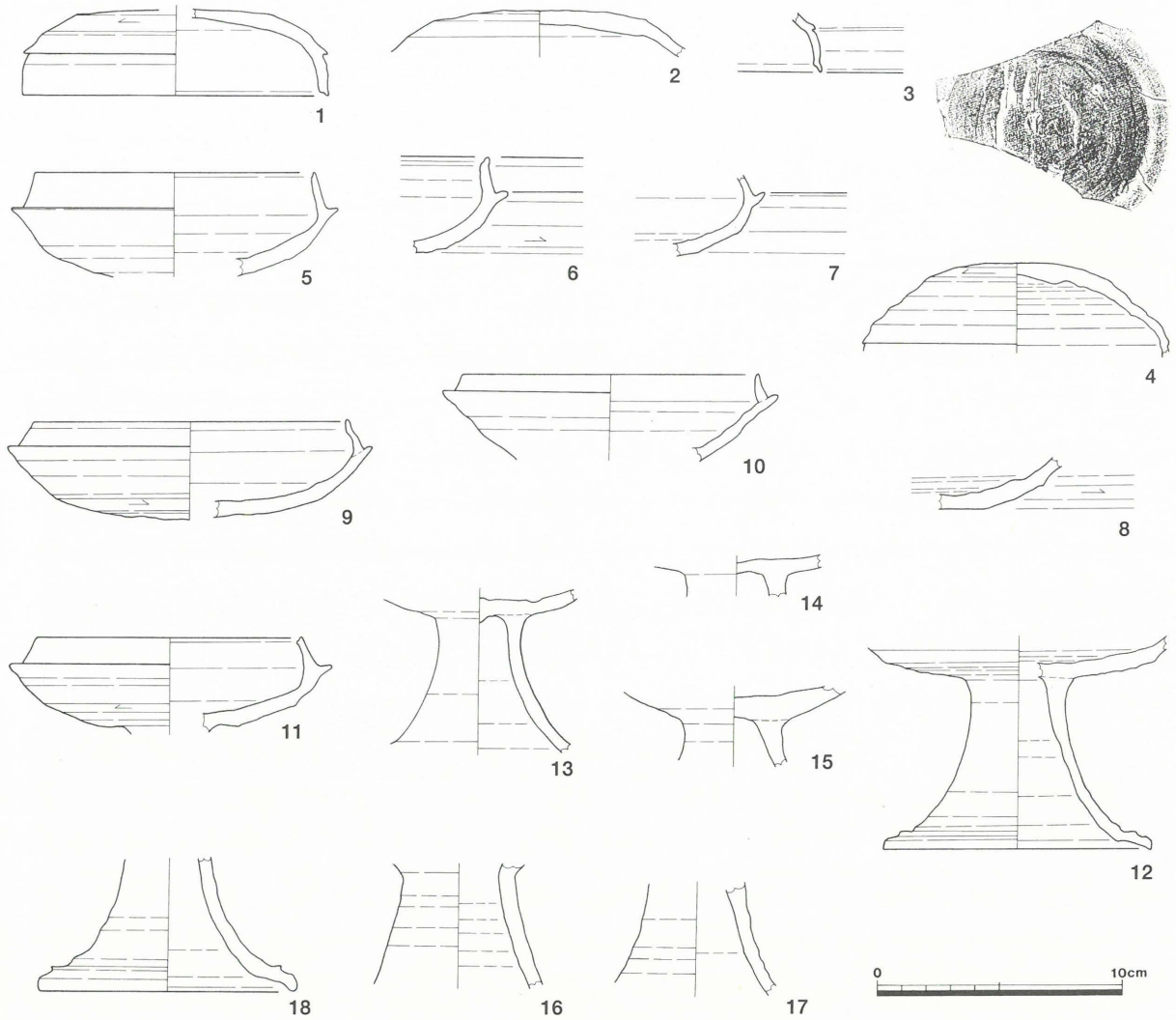
周溝出土遺物（第9図・第1表）

周溝内から出土した土器は全て須恵器であった。出土位置は、東端から1点出土した以外は、全て西端付近から出土している。

1～4は坏蓋である。1は天井部が扁平な弓張り状をなし、天井部と口縁部の境には回転ナデによって作り出された鋭い稜が存在する。口縁部は、ほぼ垂直に伸びており、端部はやや内傾し沈線が施されたように窪んでいる。天井部の2/3程に回転ヘラケズリが施され、それ以外は回転ナデである。2は天井部のみの破片であり、天井部は扁平で、1/2程は回転ヘラケズリがなされ、それ以外は回転ナデである。3は口縁部付近の破片である。口縁部はやや膨らみ端部は外方へ折れ曲がり、内側に面をもつ。天井部と口縁部の境には回転ナデによって作り出された比較的鋭い稜がみられる。4は天井部付近の破片であり、天井部は山形で1/3程は回転ヘラケズリがなされ、それ以外は回転ナデである。天井部と口縁部の境には回転ナデによって作り出された稜が明瞭に認められる。天井部には未調整部分があり、板目状の痕跡が残っている。

5～10は坏身である。5は立ち上がりが僅かに内傾して直線的に伸び、口縁端部は内側に面をもつ。受け部は外方に伸び、先端部は尖る。底部は比較的平坦と思われ、2/3程が回転ヘラケズリが施され、他は回転ナデである。6も立ち上がりが僅かに内傾して直線的に伸び、口縁端部は微かに外反し、内側には僅かに窪まされた面をもつ。受け部は外方に伸び、先端部はやや丸い。底部は比較的平坦になるものと思われ、2/3程に回転ヘラケズリが施され、他は回転ナデである。器壁は5よりも全体的に厚い。7は口縁端部及び底部を欠損している。立ち上がりは内傾しており、受け部は外方に伸び、先端部は丸く収められる。底部は比較的平坦で、2/3程に回転ヘラケズリが施されているようである。8は比較的扁平な底部で、2/3程が回転ヘラケズリされているものと思われる。9は立ち上がりがやや短く斜め上方に直線的に伸び、端部付近で僅かに外反する。端部は丸く内側に面をもつ。受け部は外上方に伸び、先端部は丸い。底部は比較的扁平だが丸みを帯びており、1/2程に回転ヘラケズリが施され、他は回転ナデである。10は立ち上がりが短く斜め上方に直線的に伸び、端部は丸い。受け部は外上方に伸び、先端部は丸い。底部は欠損しているが、受け部から直線的に窄まっている。

11～18は高坏である。11は高坏の坏部で、立ち上がりがやや内傾して直線的に伸び、口縁端部は内側に面をもつ。受け部は外方に伸び、先端部はやや丸い。坏底部は比較的平坦で、1/2程に回転ヘラケズリが施され、他は回転ナデである。坏底部には脚部との接合部が僅かに残存しており、高坏と判断した。12は口縁部を欠損している。坏底部は比較的平坦で、2/3程に回転ヘラケズリが施されていたものと思われる。坏部と脚部を繋ぐ接合部は4.2cmと比較的細く、脚部はラッパ状に開き、裾部で回転ナデによって作られた稜を有し、端部へと若干折れ曲がる。端部付近は僅かに内湾し、やや丸く収められている。13は口縁部と底部を欠損している。坏底部は比較的平坦で、坏部と脚部を繋ぐ接合部は比較的細く、脚部はラッパ状に開いている。14・15は坏部と脚部を繋ぐ接合部の破片で、径は比較的小さい。16・17は脚上部の破片であり、ハの字状に開いている。18は脚部である。脚部はラッ



第9図 周溝出土遺物実測図 (1/3)

パ状に開き、裾部で回転ナデによって作られた稜を有し、端部へと更に分開く。端部はやや内湾し、丸く収められている。

さて、これら須恵器の帰属時期であるが、陶邑古窯址群の田辺昭三氏の編年（註1）によれば、6世紀中葉の1・2・5～8・11～14・18がTK-10型式併行期に、6世紀後葉の3・4・9・10・15～17がTK-43型式併行期にそれぞれ比定できよう。10はTK-43型式併行期より、やや新しい様相を示している。

註1 田辺昭三 1981 『須恵器大成』

2. 古墳以外の遺構・遺物 (第10～12図)

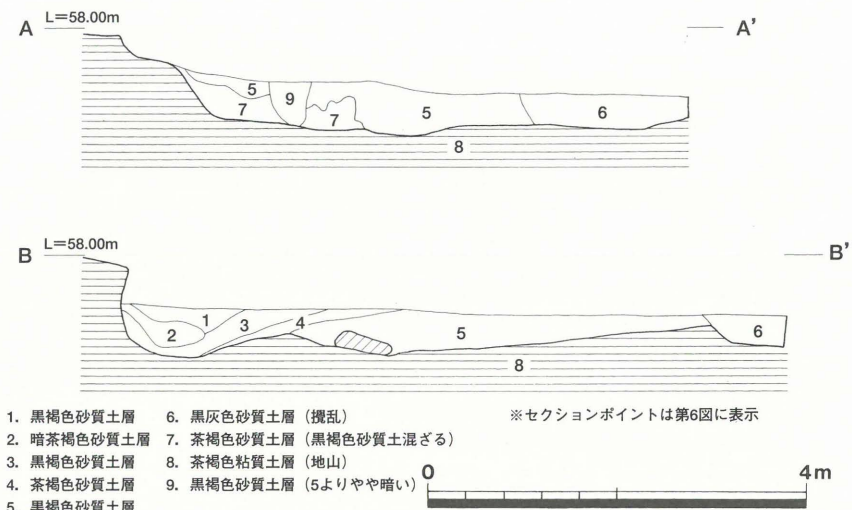
古墳以外の遺構では、調査区全体がほぼ墳丘内に位置するため、古墳築造以前の竪穴住居が2軒と帰属時期不明の土壌が若干あるのみと少ない。

A. 竪穴住居 (第10・11図)

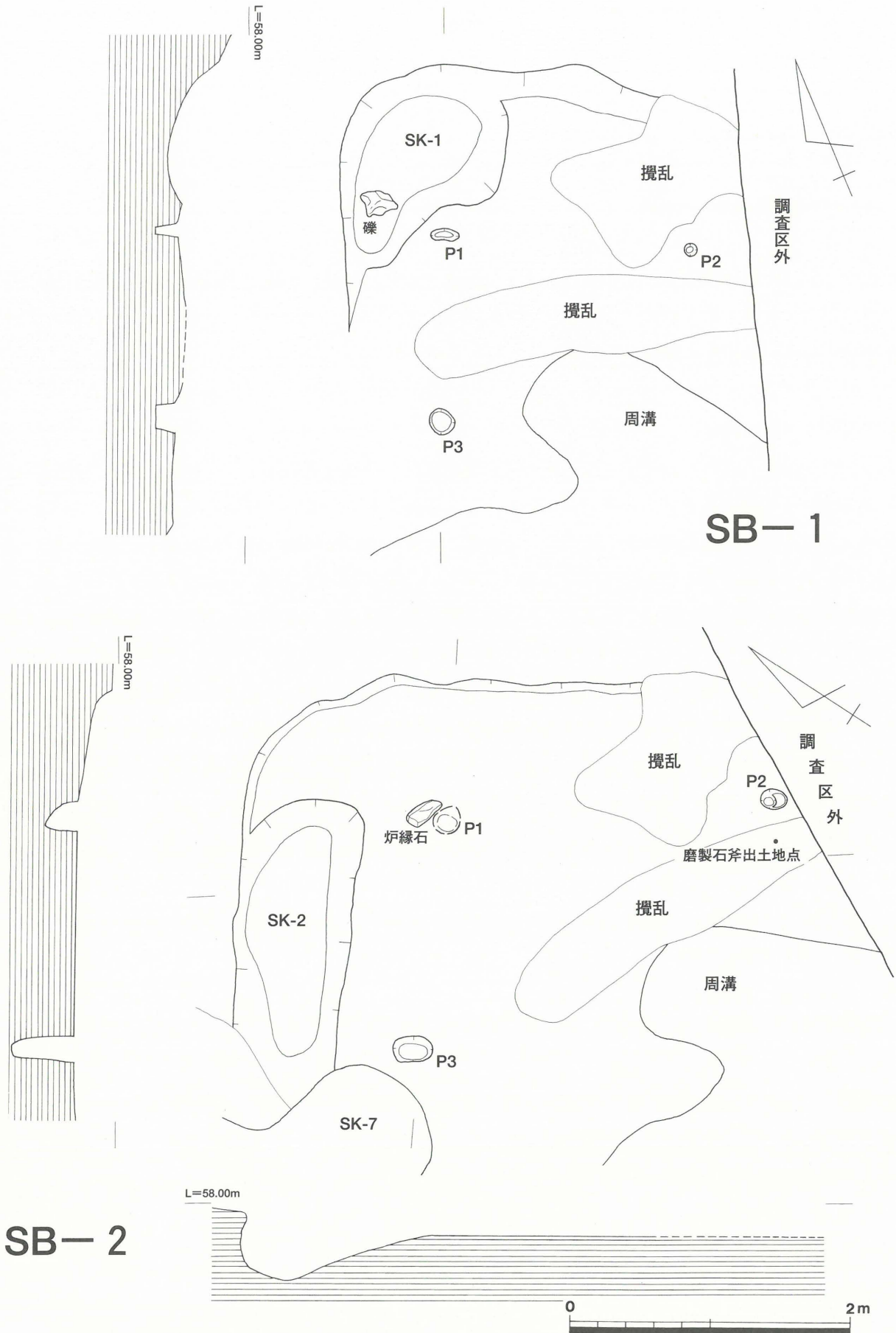
竪穴住居は、調査区東部、墳丘内に含まれる地点で2軒が重複して検出されている。遺構の切り合い状況からSB-1の方が古いという先後関係が確認できている(第10図)。ここでは、先に竪穴住居の概要を述べ、後に出土遺物を説明する。

SB-1 (第11図)

SB-1は北西角付近が検出されたのみで、北東角付近は調査区外になり、南側部分の住居壁面は古墳築造時に周溝等によって削平されているようで検出されていない。住居の角部分は丸く、平面形は隅丸方形もしくは隅丸長方形をなすものと推定される。規模は東西方向が2.9m以上、南北方向が住居壁の確認できる地点までで2.0m以上を測る。住居の主軸方位はN-24°-Eである。住居壁の傾斜は比較的緩やかで、最も残っているところで深さ30cmを測るように掘り込みは深い。住居壁際の壁溝は確認されていない。床面は比較的平坦で、地山面から41cm(最大値)の深さで掘り込まれている。床面は精査したが、明確に柱穴と判断できる土壌はなかった。ただ住居北部から直径は小さいが比較的深い土壌が2基検出でき、これと対称的な位置にある土壌を含めた3基を柱穴と扱った。これらの柱穴は、積極的に柱穴であるとは断言できるものではなく、消去法で認めた柱穴である点をご理解いただきたい。柱穴は4支柱穴のタイプの長方形配置をなしていたものと思われ、南東角付近の1カ所は古墳周溝の位置にあり、削平されたものと考えられる。3基の柱穴のうち、P1は北西角部より内側に1.2mの位置にあり、長径21cm、短径8cmの楕円形をなし、床面からの深さは17cmを測る。P2は住居端より内側に1mの位置にあり、径9cmの円形で床面からの深さは14cmを測る。P3は北側住居端より内側に2.5mの位置にあり、径17cmの円形で床面からの深さは15cmを測る。各柱穴間の距離はP1～P2が1.8m、P1～P3は1.4mをそれぞれ測る。住居内には貯蔵穴と考えられるSK-1が住居北西角の位置に検出されている。SK-1は平面形が洋梨形



第10図 竪穴住居断面図 (1/40)



第11図 竪穴住居実測図 (1/40)

で、長径152cm、短径114cm、深さ31cmの土壇である。土壇内からは遺物は出土していないが、長さ26cmの礫が出土している。

S B - 1 出土遺物

出土遺物は全くなく、住居の帰属時期は不明であるが、後述するS B - 2が弥生時代前期の水神平式期と考えられるため、S B - 1の帰属時期はこれと同時期か、それ以前のものと思われる。

S B - 2 (第11図)

S B - 2は、S B - 1を壊して造られているが、東側角付近は調査区外になり、南側部分の住居壁面は古墳築造時に周溝等によって削平されているようで検出できていない。住居の角部分は丸く、平面形は隅丸長方形をなすものと推定される。規模は東西方向が4.6m以上、南北方向が西側住居壁の貯蔵穴端までで3.1m以上を測る。住居の主軸方位はN-34°-Wである。住居壁の傾斜は垂直に近く、後述する貯蔵穴部分ではオーバーハングしている。住居壁は最も深いところで24cmを測るように掘り込みは深い。S B - 2はS B - 1と大半が重複しているため、重複部分を覆うように貼床をして床面を形成させていた。貼床は地山と同質の土(茶褐色砂質土)でなされており、厚さは約5cmであった。残念なことに調査では貼床を除去した段階で貼床の存在に気づいたため、貼床上面の記録はない。ただ、図面上での復元は可能であるため、復元した床面で住居を示している。床面は、S B - 1床面上に堆積した厚さ20cm程の黒褐色砂質土上に貼床されており、比較的平坦に茶褐色砂質土が敷き詰められている。住居壁際には深さ1cmにも満たない厚さで、幅5cm程の黒褐色砂質土が溝状に巡っており、壁溝が存在していた可能性は高い。

柱穴は3基が確認されている。南東角付近の1カ所は古墳周溝の位置にあり、削平されたものと考えられる。P 1はS B - 1貯蔵穴中に掘り込まれた柱穴で、平面検出では確認できず、断面で確認したものである。このため平面形は不明であるが、北西角部より内側に1.4mの位置にあり、幅20cmで床面からの深さは25cmを測る。P 2は調査区端の位置にあり、長径18cm、短径14cmの楕円形で床面からの深さは32cmを測る。P 3は北側住居端より内側に2.6mの位置にあり、長径28cm、短径19cmの楕円形で床面からの深さは44cmを測る。各柱穴間の距離はP 1～P 2が2.4m、P 1～P 3は1.7mをそれぞれ測る。3基の柱穴のうちP 2がやや壁際に寄るため、想定される柱穴配置は4支柱穴の台形配置と思われる。明確な炉跡は確認できなかったが、P 1に隣接して礫が1個出土している。礫の規模は長さ24cm、幅11cm、厚さ12cmの横長の長方体で、上面には平坦面を有す。礫は焼けており、本来は炉縁石として用いられていたものが原位置から移動させられP 1に隣接したのと考えられる。この礫を注意深く観察すると、上面と両側面の三面が焼けていることに気づく。礫が1個という点と三面が焼けているということから、この住居の炉形態は橋良遺跡S B - 11で検出されているような炉縁に細長い礫が1個置かれる石置炉で、この礫は石置炉の支柱石であったのではないかと考える。この他、住居内には貯蔵穴と考えられるS K - 2が住居西端の位置に検出されている。S K - 2は平面形が長楕円形で、南端の一部が攪乱によって壊されている。住居壁と一体化している長径224cm、短径86cm、深さ41cmの土壇である。土壇内からは条痕文土器片1点と黒曜石剥片が出土している。

SB-2 出土遺物 (第12図・第1表)

出土遺物は住居北西角部分から条痕文土器の破片(1)が1点、貯蔵穴内からは条痕文土器の壺頸部破片(2)1点と黒曜石の剥片(3)が1点出土したのみと出土量は極めて少ない。また、住居内攪乱部より塩基性岩の扁平片刃磨製石斧(4)が出土しており、調査区内外では弥生時代の遺物は住居出土遺物以外には見られないため、石斧は住居に伴うものと考えたい。この扁平片刃磨製石斧は佐藤由紀男氏が弥生系磨製石斧と呼ぶもので、浜松市沢上Ⅳ遺跡や半田山Ⅰ遺跡で条痕文土器と伴出した例(註1)が知られており、水神平式期の住居から出土しても不思議ではない。

1は条痕文土器の体部破片であり、外面には半截竹管による条痕文が施されている。2は条痕文土器の壺頸部破片で、櫛状工具による横位の条痕文の上部に、櫛描波状文が施されている。3は剥片であり、調整剥離は殆ど行われていないが、側面から2カ所の敲打痕が認められる。石材は黒曜石である。4は磨製石斧である。いわゆる小型の扁平片刃石斧で、平面形は胴張長方形に近く、扁平で側面、基部に面をもつ。刃部はやや丸みを帯びており、片刃をなしている。調整は全体的に研磨され、特に刃部が丁寧に作られている。基部には敲打による若干の剥離が見られる。石材は塩基性岩である。

註1 佐藤由紀男 1999 『縄文弥生移行期の土器と石器』



第12図 SB-2及びSB-2内攪乱部出土遺物実測図 (1/2)

1 : SB-2 北西部
2・3 : SB-2内 SK-2
4 : SB-2内 攪乱部

B. 土壙 (第6図)

土壙は調査区南側に土壙群が密集するが、土壙群と竪穴住居柱穴や貯蔵穴を除くと殆ど検出されおらず、明確なものは5基が確認されたに過ぎない。竪穴住居柱穴及び貯蔵穴SK-1・2は既に説明しているので割愛し、ここではそれ以外の土壙を扱う。なお土壙群は、径が小さく底面が尖り気味で垂直に掘られたものが殆どないため、人工的に掘られたものも多少あるかも知れないが、大半は木の根等の痕跡であるものと考え触れない。

SK-3 (第6図)

平面形は円形をなし、規模は径21cm、深さは22cmを測る。埋土は暗灰褐色砂質土である。土壙内からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK-4 (第6図)

土壌は西側が調査区外、東側が攪乱で欠いており、平面形は不明である。規模は残存長54cm、幅40cm、深さは9cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。土壌内からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK-5 (第6図)

平面形は円形をなし、規模は径25cm、深さは8cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。土壌内からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK-6 (第6図)

土壌は北側と東側を調査区外で欠いているが、おそらく平面形は円形と思われる。規模は長さ20cm、深さは11cmを測る。埋土は灰褐色砂質土である。土壌内からは遺物は出土しておらず、時期は不明である。

SK-7 (第6図)

大型の土壌で、北側でSB-2を壊しており、南西側で攪乱により壊されている。南側で周溝と重なり、周溝を壊している。平面形は良くはわからないが方形に近いものと思われ、規模は長さ2.6m、幅2.4m、深さ41cmを測る。埋土は暗灰色砂質土である。遺物は出土しておらず、時期は不明である。

3. 表土出土の遺物 (第13図・第1表)

表土からは若干の遺物を採集したのみで、量は極めて少ない。古墳に伴う須恵器と中世陶器、近世陶器、土師器が認められている。なお、中世陶器、近世陶器に伴う遺構は確認されていない。

須恵器 (第13図1～4)

1は長頸壺である。口縁部は直線的に外方に開き、端部は丸い。外面途中に沈線が3条入れられている。頸部は若干ナデ窪まされており、体部にかけて屈曲して広がる。体部は肩が張り出し、4条の沈線が巡らされている。体部から底部へは緩やかに窄まり、底部は比較的平坦で、静止ヘラケズリがされており、それ以外は回転ナデである。2は短頸壺である。口縁部は短く直立し、端部は丸い。体部は丸く張り出し、底部にかけて窄んでいる。調整は回転ナデである。3は甕の体部である。ほぼ球形に近く、底部も丸みを帯びている。肩部付近に2条の沈線を巡らし、その間を櫛による連続刺突文を斜位に施しているようである。沈線間に5mm程の円孔を入れている。全体的に摩滅が著しく、調整は不明である。4は甕の体部破片である。肩部に近い部分と思われ、緩やかに内湾している。外面には上部に横位、下部に縦位のタタキメがみられる。

さてこれらの帰属時期であるが、1は6世紀後葉、2は6世紀中葉と思われる。3は6世紀末葉のTK-209型式併行期に比定されよう。4は時期不明だが、古墳に伴うものとする6世紀後半の可能

性がある。

中世陶器 (第13図5～7)

5は碗の底部で、有高台のものである。高台の断面形は箱形で、接地面に砂痕が認められる。底面は糸切り痕がみられる。6も有高台の碗の底部である。高台の断面形はU字形で、底面は糸切り痕がみられる。7は片口鉢である。口縁部は緩やかに広がり、端部付近でやや外反する。端部は丸く、1カ所に片口が付いている。

これらの帰属時期は、5は12世紀中葉、6は12世紀末葉、7は12世紀代のものと思われる。

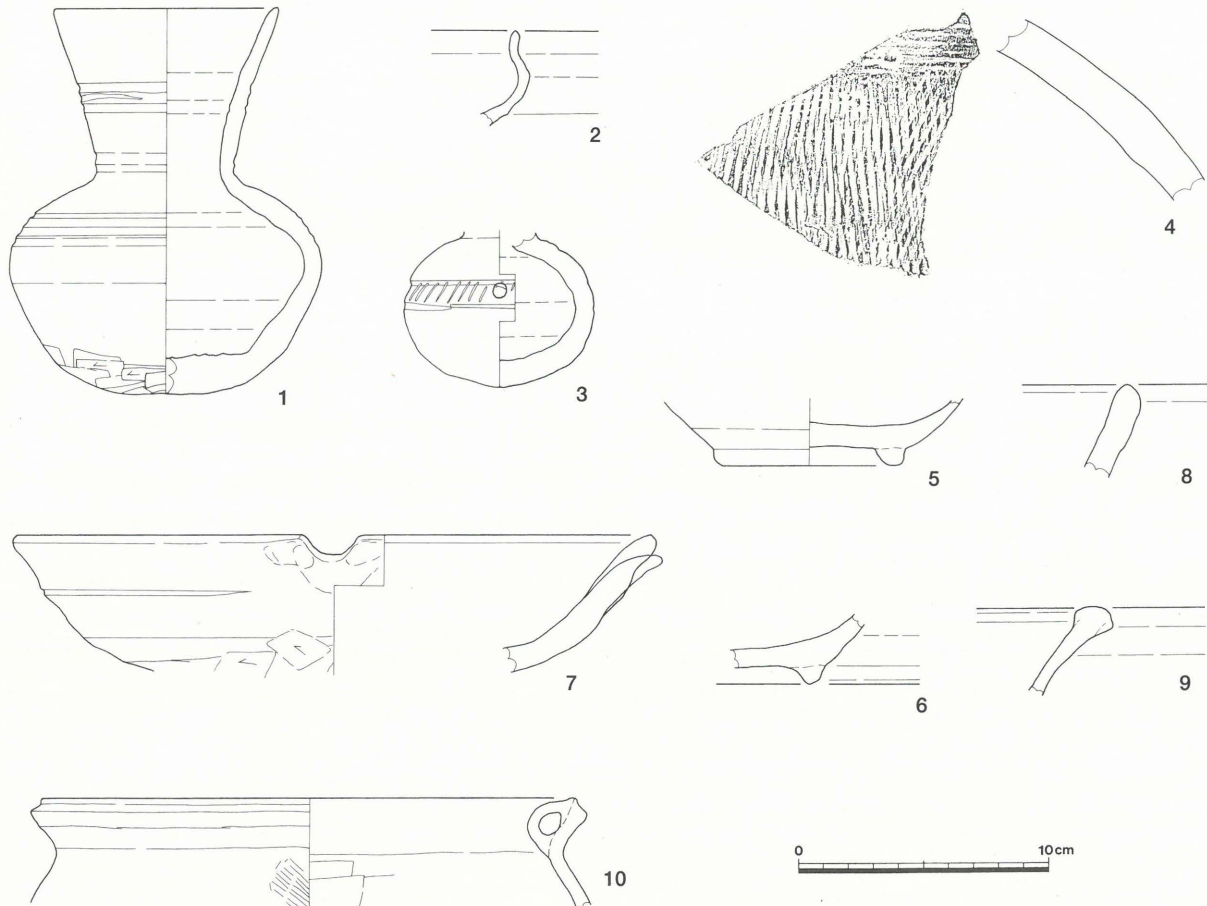
近世陶器 (第13図8・9)

8は鉢の口縁部破片と思われ、口縁部が若干肥厚され、端部は丸い。無釉である。9は瀬戸産の摺鉢の口縁部破片である。口縁部は外方へ広がり、端部は丸く肥厚されている。鉄釉が掛かる。

時期は8は近世のもの、9は19世紀後葉のものと思われる。

土師器 (第13図10)

10は鍋の口縁部である。いわゆるくの字形内耳鍋であり、口縁部はくの字形に屈曲し、内側に内耳をもつ。口縁端部はナデ窪められ、体部にはハケメ調整が行われる。時期は15世紀中葉～16世紀のものと思われる。



第13図 表土出土遺物実測図 (1/3)

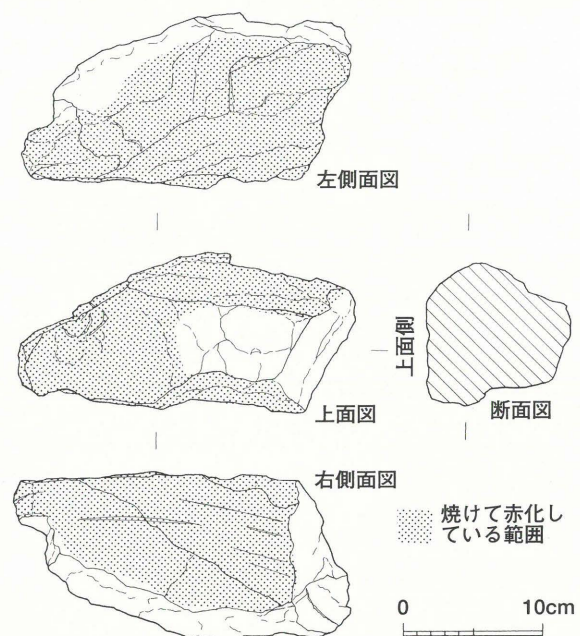
第5章 まとめ

1. 弥生時代前期水神平式期の竪穴住居について (第14・15図)

今回の調査では、墳丘内に相当する地点から予想外の竪穴住居が2軒重複して検出できた。このうちのSB-1からは遺物が出土せず、SB-2からは2点の水神平式土器が出土しているのみである。しかし、条痕文期住居の典型例とされている吉胡貝塚の竪穴住居は、円形で柱穴が環状に巡る、いわゆる縄文時代晩期住居と同様な形態である。すると、隅丸長方形となるSB-2とは形態が合わず、同時期に2形態の住居が存在したことになる。ここでは、SB-2の形態を復元し、併せて周辺地域の水神平式期を含めた条痕文期の住居様相を考える。

まず、SB-2の平面形を考えよう。住居は2辺の壁面のみが明確になっており、この2辺は、コーナー部は丸いが、ほぼ直角をなしている。この点と柱穴の位置関係、距離から、SB-2の平面形は隅丸長方形をなしていたものと推定される。次に柱穴の配置であるが、3基の柱穴がL字状に並ぶことから、本来は4基の柱穴が長方形に配置されていたと考えられる。ただ、長辺側の柱穴であるP1とP2を比較すると、住居壁からの距離がP1が0.8mなのに対し、P2は0.6mと短く、P1～P3の柱穴配置角度も 112° と直角より広がっている。この点を考慮すると、柱穴配置は台形配置とした方がより正確である。住居内短辺側にはP1とP3の柱間幅で細長く深い土壇(SK-2)があり、これを貯蔵穴と判断した。この貯蔵穴は住居壁と一体化した大型なもので、貯蔵穴の位置から考えると入口は貯蔵穴と対角する住居短辺側にあったものと推定される。つまり、入口側の柱穴間隔の方が奥側より広く、出入りがし易い構造になっていたのだろう。

さて、問題なのは炉である。P1に隣接して焼けた礫(第14図)が1個出ており、橋良遺跡で検出されているような石置炉が存在していた可能性があることは、本文中で示したとおりである。貼床のされた床面では残念ながら焼けた部分は検出できていないが、縄文時代晩期～弥生時代中期の住居例が示すように、台形配置の柱穴間内に存在していたことはほぼ間違いないものと思われる。だが、その位置が問題である。縄文時代晩期末葉の檜王式期以前に多い中央型なのか、それとも弥生時代中期後葉の長床式期に多い偏在型、あるいは柱間型のいずれかになるものかはわからない。ただ、中央型は各方向から煮炊きできるため石囲炉もしくは地床炉が多い傾向にある。石置炉については、筆者は片側からの煮炊き用の炉と考えており(註1)、実際に住居内での位置も偏在型もしくは柱間型である場合が主体的である。こうして復元した住居形態が、第15図である。短辺側の長さは推定できるが、長辺側の長さは貯蔵穴があるため、P1とP2の住居壁までの



第14図 SB-2出土炉縁石実測図 (1/5)

距離が同じとは限らないため推定していない。

次に条痕文期住居の様相を概観し、奈木4号墳SB-2と比較してみよう。さて条痕文期住居であるが、この時期の住居が発見されているのは豊田市秋葉遺跡、稲武町クダリヤマ遺跡、田原町吉胡貝塚、浜松市前原Ⅶ遺跡・沢上Ⅳ遺跡・半田山遺跡の6遺跡8軒と少ない。櫛王式期のものは、秋葉遺跡とクダリヤマ遺跡で検出されている。秋葉遺跡1号住居は平面形が隅丸長方形の竪穴住居である。残存状態の良好な同第2号住居は隅丸方形の竪穴住居で、柱穴4基が方形に配置されていた。住居中央には石囲炉があり、壁際中央には貯蔵穴も見られる。クダリヤマ遺跡では、隅丸方形もしくは隅丸長方形の竪穴住居が見つかったが、柱穴は特定されていない。住居内の偏在した位置には石囲炉がある。

奈木4号墳SB-2と同時期の水神平式期では、吉胡貝塚、前原Ⅶ遺跡で発見されている。吉胡貝塚のものは、平面形が円形で柱穴が壁際を巡る竪穴住居であり、縄文時代晩期の系譜をそのまま継続している。炉は明確にはわからないが、焼けた礫が住居内から出土している。前原Ⅶ遺跡では2軒の竪穴住居が確認されている。そのうち、比較的残りの良いSB02は、平面形が隅丸台形をなしている。報告書では柱穴が特定されていないが、住居内には6基の土壌が検出されており、最も外側の土壌を結ぶと、4基の土壌が台形に配置されており、これが柱穴と思われる。炉は確認されていない。

条痕文期最後の続水神平式期は、沢上Ⅳ遺跡、半田山遺跡で各1軒の住居が検出されている。沢上Ⅳ遺跡のSB304は、平面形が隅丸長方形の竪穴住居で、1基の柱穴を他土壌によって欠くが、本来は柱穴4基が台形に配置されていたものと思われる。住居内の偏在した位置に地床炉が見つかった。半田山遺跡SB1は、削平が著しいため住居壁が確認されておらず、報告書では竪穴住居なのか平地住居なのかは断定されていない。3基の柱穴が検出されており、1基の柱穴を調査区外によって欠くが、本来は4基の柱穴が台形に配置されていたものと思われる。柱穴間の偏在した位置に地床炉が見つかった。

このように条痕文期には、平面形が隅丸方形、隅丸長方形、隅丸台形などの方形タイプの住居が主流を占め、これらとは別に円形タイプの竪穴住居も見られる。縄文から弥生時代への混沌とした時期には、円形タイプと方形タイプの2形態の住居が混在していたものと思われる。

註1. 岩瀬彰利 1996 「縄文・弥生時代の煮炊方法—大西貝塚・橋良遺跡例より推測した一例—」『鍋と甕そのデザイン』

参考文献

伊藤達也 1987 「秋葉遺跡」『愛知県埋蔵文化財情報』2 愛知県教育委員会他

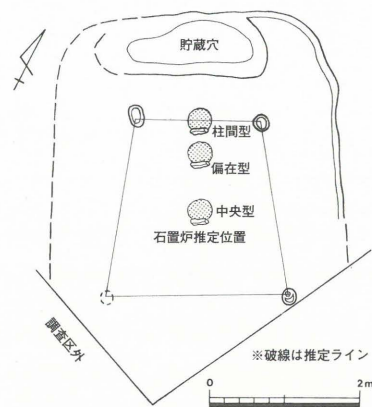
稲武町教育委員会 1995 『クダリヤマ遺跡』

岩瀬彰利 1997 「三河湾・伊勢湾周辺地域における縄文時代住居の変遷について(Ⅰ)—三河・尾張編—」『三河考古』第10号

田原町教育委員会 1981 『田原の文化』第7号

浜松市教育委員会 1987 『浜松市半田山遺跡(V)発掘調査報告書』

浜松市教育委員会他 1990 『都田地区発掘調査報告書』下巻



第15図 SB-2推定復元図 (1/100)

2. 豊川流域における弥生系磨製石斧と条痕文系集団について

今回の調査では、SB-2の住居内の攪乱した場所から扁平片刃磨製石斧が出土している。調査区の位置する場所には墳丘削平後に牛舎が建てられており、近年その牛舎撤去及び整地によってバックホーによる掘削が行われている。住居内で2カ所みられた攪乱もその際のもので、建物基礎撤去等の掘削のため、掘削土が運ばれることはなく、ほぼ原位置に戻されている。扁平片刃磨製石斧は攪乱部の地山直上で出土している。掘削土がほぼ原位置である点と、調査区内外では弥生時代の遺物は住居出土遺物以外には見られないため、この石斧は住居に伴っていたものと考えられる。

この地域の条痕文期石器は佐藤由紀男氏が研究(註1)を進めており、その成果に従って扁平片刃磨製石斧について考えたい。佐藤氏は縄文時代から継続する乳棒状石斧を縄文系磨製石斧、遠賀川系集団(註2)の用いた大型蛤刃や片刃の磨製石斧を弥生系磨製石斧と呼んで区別している。この地方の条痕文期には縄文系磨製石斧を主体的に使用している。そして、豊川市麻生田大橋遺跡や浜松市川山遺跡では、弥生時代中期まで継続して縄文系磨製石斧を生産していたことが確認されている。

一方、条痕文系集団でも弥生系磨製石斧も使用されていたようで、浜松市沢上Ⅳ遺跡や半田山Ⅰ遺跡では条痕文土器と伴出した例が僅かではあるが知られている。これらの弥生系磨製石斧は、中央構造線外帯の豊橋から浜名湖北部に分布する塩基性岩類を石材として用いており、この地域で生産されたもので、佐藤氏によると遅くとも中期には弥生系磨製石斧の生産が行われたとのことである。そして、この地域では条痕文期において、弥生系磨製石斧の生産拠点はわかっていないが、縄文系磨製石斧と弥生系磨製石斧の両者を併行して生産していたと推測されている。確かに、奈木4号墳SB-2から出土した弥生系磨製石斧も地元産の塩基性岩が用いられており、この地域での生産が前期まで遡るものと考えられる資料である。

さて、弥生系磨製石斧生産において問題なのは、製作集団である。一つは、条痕文系集団が弥生系磨製石斧の製作技術の情報を入手して生産していたという考えである。ただ、もしそうであるとしたら、生産拠点である麻生田大橋遺跡や川山遺跡で未製品が出土しても良いはずであるが、未だ発見されていない。弥生系石器専門の他の拠点で生産していたのであろうか。もう一つは、遠賀川系集団が地元で製作した弥生系磨製石斧が交易によって条痕文系集団に供給されたという考えである。奈木4号墳の近くの台地上に白石遺跡があり、ここは檜王式期の遠賀川系集団の拠点と考えられている。水神平式期には遺跡は機能していなかったようであるが、白石遺跡と同様な未発見の集落が存在していても不思議ではない。そこで生産した弥生系石器が条痕文系集団へ流布していたとも考えられる。

2説とも断定しがたいが、いずれにせよ、水神平式期にこの地域では弥生系磨製石斧を生産していたことには間違いあるまい。そして、弥生時代中期へと続く方形住居といい、弥生系石器の使用といい、条痕文系集団は予想以上に弥生文化を受け入れていたといえよう。

註1 佐藤由紀男 1999 「伊勢湾周辺における弥生系磨製石斧の生産と流通」『縄文弥生移行期の土器と石器』

註2 遠賀川系集団とは遠賀川式土器を用いていた人々のことで、条痕文土器を用いた人々は条痕文系集団と呼んで便宜的に区別する。

3. 奈木4号墳について (第16図)

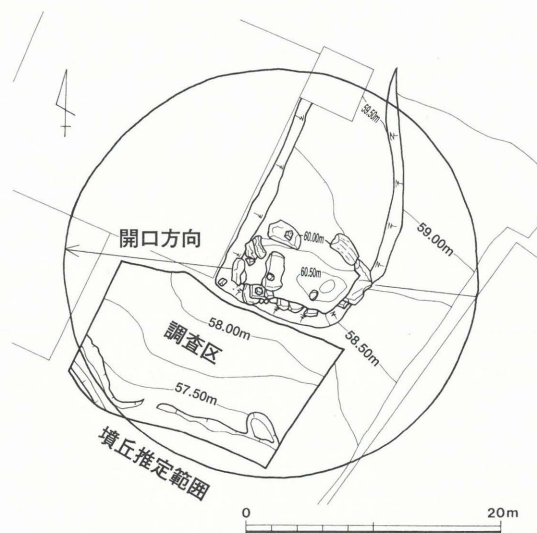
今回の調査では、古墳関係の遺構では周溝が検出されたのみであり、発掘調査の結果だけでは全体像はわからない。しかし、残存した墳丘に対して測量調査も併せて行っているため、若干ではあるが古墳の内容がわかってきた。ここでは、発掘調査及び測量調査の成果をまとめ、奈木4号墳について考える。

墳丘は、1/5程しか残存していなかったが、石室部分はほぼ残存していた。調査区南西側で古墳の周溝が確認されている。周溝は幅0.7~1.3m、深さは0.2~0.4mである。周溝の形態と石室の位置関係から墳丘規模を推定したものが第16図である。墳丘は直径16.4mの円墳と考えられ、残存高は1.8mを測る。墳丘には葺石もしくは外護列石等の外部施設があったようである。

石室は横穴式石室で、内部は土砂で埋まっていた。奥壁と羨道部が壊されていたが、残存長は4.9m、奥壁側の幅は1.1mを測り、推定する開口方向はN-84°-Wである。奥壁は一枚岩ではなく、3個の石材からなっていたといわれ、このことから石室は萬福寺古墳と同様に無袖型であるものと思われる。石室自体の残存状況は良好で、天井石が4個露出していた。規模から推定すると、おそらく7個の天井石が残っているものと考えられる。

最後に古墳の築造時期であるが、須恵器は周溝及び表土から出土しているが、墳丘残存部からは採集できていない。このうち、周溝から出土した須恵器は、石室入口から見て右側に位置する周溝部でまとめて出土している。これら須恵器は、坏蓋、坏身、高坏の供膳具のみで、他の器種は見られなかった。おそらく玄室入口付近に供膳されたものが、追葬時に掻き出されたものと思われる。一方、表土からは長頸壺、短頸壺、甗、甕が出土しており、これは周溝出土の器種と異なっている点は興味深い。さて、これら須恵器の時期であるが、最古のものは6世紀中葉のTK-10型式に併行するものと比定される。この時期を古墳築造年代と断定するには危険かもしれないが、少なくとも奈木4号墳は6世紀中葉には築造されていたことは間違いないものと思われる。他の須恵器は、6世紀後葉のTK-43型式併行のものと比定されるが、第9図10のように新しい様相を示すものもある。こうしてみると、2型式の須恵器が認められることから、奈木4号墳には少なくとも2回の追葬が行われた可能性がある。表土中からは、壺、甗、甕の須恵器が出土しているが、周溝出土の時期と明確に異なるものはない。

以上のように奈木4号墳は、6世紀中葉と奈木古墳群中でも古く、直径16.4mと古墳群最大の円墳で、この地域でも有数の規模の円墳であることがわかった。



第16図 奈木4号墳墳丘範囲推定図 (1/300)

4. 奈木古墳群について (第2表)

奈木古墳群は、山頂、尾根、山麓緩斜面に立地する古墳時代後期の群集墳であり、15基の円墳によって構成されている。萬福寺古墳(奈木11号墳)が調査された1962年頃は、奈木古墳群は滅失している2号墳と奥壁のみを残す3号墳以外は保存状態は良好であるとされている(註1)。ただ、近年では山地造成も盛んであり、萬福寺古墳調査頃と比べ状況の悪化も考えられた。また、奈木古墳群全体の調査が行われた例もなく、古墳群の詳細は不明と言わざるをえない。このため、古墳の確認及び計測を主目的とした簡単な調査を行い、計測データ(第2表)を集成した。以下それを基に古墳群の概要を述べるものとする。

奈木1号墳は、本古墳群中最も保存状況の良い古墳である。古墳は、直径11.2mの円墳と考えられ、残存高は2.2mを測る。墳丘には葺石等の外部施設は確認されていない。石室は横穴式石室で、単室構造の疑似両袖型である。石室の長さは7.7m、高さ2.5m、玄室の長さは4.5m、幅は1.9m、玄門幅0.9mを測る。開口方向は南南西である。石室内は現在は倉庫として使われており、かつて須恵器や刀が出土したそうである。

奈木2号墳は既に滅失しており、奈木3号墳は奥壁のみが、高さ1.3m、幅1.5mの大きさで地上に露出している。

奈木5号墳は1987年に測量(註2)がされているもので、墳丘が1/3以上削平されるという保存状況の悪い古墳である。古墳は、直径14mの円墳と考えられ、残存高は2.0mを測る。石室は西に開口する横穴式石室であるが規模等は不明である。

奈木6号墳は1987年に試掘・測量(註2)がされているもので、保存状況の比較的良好な古墳である。古墳は、直径14mの円墳と考えられ、残存高は2.7mを測る。周溝は幅1.5m、深さは0.2mである。墳丘には葺石が確認されている。石室は不明である。出土遺物には須恵器(坏蓋・坏身・高坏)があり、6世紀中葉の築造と考えられている。また須恵器に複数型式が認められるため、追葬が行われていたものと思われる。

奈木7号墳は、現地で確認できなかった古墳である。探索期間が1日と短かったため、見落としがあった可能性も完全には否定できないが、現地周辺は道路や墓地が造成されており、既に削平されてしまった可能性がある。

奈木8号墳は石室の石材が全て抜き取られている古墳である。古墳は尾根上にあり、直径11mの円墳と考えられ、残存高は1.7mを測る。墳丘には葺石が確認されている。石室は不明であるが、石材抜き取り穴が長さ5.9mあり、開口方向は南側であったようである。

奈木9号墳は尾根頂上にある円墳で、保存状況の比較的良好な古墳である。古墳は、直径12mの円墳と考えられ、残存高は1.4mを測る。墳丘上には祠が祀られており、石室は不明であるが、石室石材と思われる石が露出している。

奈木10号墳も保存状況の良い古墳である。古墳は、直径13.5mの円墳と考えられ、残存高は3.5mを測る。墳丘頂部はやや陥没している。石室は横穴式石室で埋没しているが、羨門部の立柱石(0.9m間隔)が露出している。羨門が見られることから、石室は単室構造の疑似両袖型である可能性が高い。

開口方向は南南西である。

奈木11号墳は、別名萬福寺古墳とも呼ばれ、市指定の史跡になっている。1962年に石室内が発掘調査（註1）されているもので、本格的な調査が行われた唯一の古墳である。古墳は、直径12mの円墳と考えられ、残存高は3.5mを測る。墳丘には葺石が確認されている。石室は長さ8.3m、最大幅1.7m、最大高2.05mの無袖型の横穴式石室である。出土遺物には須恵器（坏蓋・盃・提瓶・鳥形裝飾付蓋・甗・脚付短頸壺）、鉄製品（大刀・環頭大刀柄頭・鉄鍬・弓飾り金具・刀子）、装身具（耳環・勾玉・管玉・棗玉・小玉）があり、追葬もあり13体以上の人骨も確認されている。出土遺物より6世紀後葉の築造と考えられている。

奈木12号墳は1987年に測量（註2）がされたもので、直径13mの円墳と考えられ、残存高は2.25mを測る。墳丘には石材が散らばっており、葺石があったものと思われる。石室は不明である。

奈木13号墳は、直径8.3mの円墳と考えられ、残存高は2.1mを測る。石室の形態は不明である。

奈木14号墳は探索するのが困難であったが、古墳位置に僅かな高まりがあったため、これを古墳と扱った。古墳は直径6m、残存高は1.1mと小さな円墳である。石室は不明である。

奈木15号墳は直径10.2mの円墳と考えられ、残存高は0.8mと残りは悪い古墳である。石室は不明であり、既に石材が抜き取られたものと思われる。古墳中央が若干陥没して道になっており、これを石室の痕跡とみると、開口方向は南南西であったようである。

註1 瓜郷遺跡調査会 1968 『萬福寺古墳』

註2 豊橋市教育委員会他 1993 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第17集 古墳測量調査（I）』

第2表 奈木古墳群一覧表

古墳名	墳形	直径	残存高	内部主体	開口方位	石室種類	石室規模	玄室規模	羨道規模	周溝規模	葺石	出土遺物・土器	鉄器	装身具	築造時期	追葬	調査年	墳丘残存状況	立地	備考
奈木1号墳	円墳	11.2m	2.2m	横穴式石室	南南西	単室・疑似両袖型	長さ7.7m、最大幅1.9m、高さ2.5m	長さ4.5m、幅1.9m	長さ2.2m、幅1.3m		不明	須恵器	大刀		不明		無	良好	山麓緩斜面	玄門幅0.9m
奈木2号墳	円墳	不明	不明	不明	不明					不明		須恵器	直刀	勾玉、管玉、切子玉、小玉	不明		無	滅失	山麓緩斜面	滅失
奈木3号墳	円墳	不明		横穴式石室		無袖型	不明								不明		無	奥壁のみ	山麓緩斜面	奥壁石材高さ1.3m、幅1.5m露出
奈木4号墳	円墳	16.4m	1.8m	横穴式石室	N-84°-W	不明	残存長さ4.9m、奥壁側幅1.1m			幅1.2m、深さ0.4m	有?	須恵器(坏蓋・坏身・高坏・短頸壺・長頸壺・甗)			6世紀中葉	有	2000年	1/5残存	山麓緩斜面	
奈木5号墳	円墳	14m	2.0m	横穴式石室	西		不明			有?	不明				不明		1987年	1/3残存	山麓緩斜面	
奈木6号墳	円墳	14m	2.7m	不明						幅1.5m、深さ0.2m	有	須恵器(坏蓋・坏身・高坏)			6世紀中葉	有?	1987年	良好	山麓緩斜面	
奈木7号墳	円墳														不明		無	確認できず	山麓緩斜面	
奈木8号墳	円墳	11m	1.7m	横穴式石室	南	不明	掘方長さ5.9m			不明	有				不明		無	やや良	尾根上	
奈木9号墳	円墳	12m	1.4m	横穴式石室	不明	不明				不明	不明				不明		無	やや良	尾根頂上	墳頂に祠、石材露出
奈木10号墳	円墳	13.5m	3.5m	横穴式石室	南南西	単室・疑似両袖型?	不明			不明	不明				不明		無	良好	山麓斜面	羨門幅0.9m、石室埋没頂部やや陥没
奈木11号墳	円墳	12m	3.5m	横穴式石室	西南西	無袖型	長さ8.3m、最大幅1.7m、高さ2.05m	長さ26.0m、奥壁側幅1.3m、最大幅1.7m	長さ2.3m、幅1.4m	不明	有	須恵器(坏蓋・盃・提瓶・鳥形裝飾付蓋・脚付短頸壺・長頸壺)	大刀・環頭大刀柄頭、鉄鍬、弓飾り金具		6世紀後葉	有	1962年	良好	山麓緩斜面	別名萬福寺古墳、13体以上人骨出土
奈木12号墳	円墳	13m	2.2m	不明						不明	有?			耳環、勾玉、管玉、棗玉、小玉	不明		1987年	やや良	山麓緩斜面	石材頂部にあり
奈木13号墳	円墳	8.3m	2.1m	不明						不明	不明				不明		無	やや良	山麓緩斜面	
奈木14号墳	円墳	6m	1.1m	不明						不明	不明				不明		無	悪い	山麓斜面	
奈木15号墳	円墳	10.2m	0.8m	不明						不明	不明				不明		無	やや悪い	山麓斜面	墳丘上南南西方向に道あり

やぎゅうがわなんぶちくしくつちょうさ

柳生川南部地区試掘調査

例 言

1. 本文は、豊橋市牟呂町字松島ほかにおいて、柳生川南部地区区画整理事業に伴い事前に実施された埋蔵文化財有無の確認のための試掘調査報告である。調査期間は平成12年9月4日～9月28日、調査担当は岩原 剛（豊橋市教育委員会）である。
2. 発掘作業については、地元の方々のご協力を得た。また報告書作成にあたり、遺物の実測・トレンチなどについては村田陽子らの援助を受けた。写真撮影は発掘調査・遺物 ともに岩原が行った。
3. 本文の執筆・編集は、岩原（教育部美術博物館文化財係）が行った。
4. 本書に使用した方位は磁北である。トレンチ実測図・遺物実測図のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
5. 本調査で作成した写真・カラースライド・実測図などの記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

目 次

1. 試掘調査の目的と調査の経過	1
2. 周辺的环境	1
3. 調査の概要	2
4. まとめ	4
5. 報告書抄録	5

挿 図 目 次

第1図	周辺の遺跡分布図 (1/20,000)	1
第2図	MS-1 T出土遺物実測図 (1/3)	2
第3図	MS-1 T実測図 (1/40)	2
第4図	トレンチ位置図 (1/20,000・1/3,500)	3

表 目 次

第1表	トレンチ一覧表	4
-----	---------------	---

写 真 図 版 目 次

図版1-1	MN-2 T (東から)	2	MN-4 T (北から)
3	MN-5 T (北東から)	4	MS-1 T① (西から)
5	MS-1 T② (西南から)	6	MS-7 T (北から)
2-1	OS-1 T (西から)	2	ME-2 T (北から)
3	MH-2 T (北から)	4	HS-2 T (南から)
5	HS-3 T (北から)	6	H4-1 T (西から)

1. 試掘調査の目的と調査の経過 (第1表・第4図)

柳生川南部地区区画整理事業は、豊橋市の市域を東西に貫流する柳生川の、河口部南岸地域における、街路の整理と土地の有効活用を図るべく計画された事業である。対象面積は約600,000㎡におよび、対象地は牟呂町、神野新田町、潮崎町、柱四番町、藤沢町にまで及ぶ。

このうち牟呂町字松島・奥山付近はもともと海岸部の砂堤上、字東里付近は段丘端付近にそれぞれ位置し、集落の密集地域である。一方その外は、かつて柳生川河口の入り江であった沖積地に属するため、大半が田である。ただし現在では埋め立てによる畑地や宅地の造成が進んでいる。

平成10年度に区画整理事業の具体的な計画が浮上し、市区画整理課から事業の実施について市教育委員会への協議があった。当該地は牟呂地区・小浜地区など遺跡の集中地帯に隣接するため、埋蔵文化財の所在の有無に関する確認調査の必要性が市教委から区画整理課及び地元へ伝えられた。そして平成12年度に国庫・県費補助事業として、当該地を対象とした埋蔵文化財の所在の有無に関する試掘調査を行うこととなった。

試掘調査は、平成12年9月4日～9月28日にかけて行った。遺構が期待されない沖積地を除いた部分を調査対象としたため、調査地は牟呂町松島・奥山・東里周辺に集中する。

調査は道路によって地区を分け、それぞれの地区内でトレンチ番号を付して実施した。地区は字名などを考慮して、例えば字松島北側のトレンチ名はMN-1T・MN-2T、南側はMS-1T・MS-2T、字奥山新田はOS-1T・OS-2Tといった具合で設定している。トレンチは2×1mの長方形を基本形に、計25カ所設けた。掘削はすべて人力で行い、基盤層までの検出を基本としたが、二次堆積との判別が困難な場合は、基盤層を掘り抜いて確認している。各トレンチの名称と概要、位置については第1表及び第4図を参照されたい。

2. 周辺環境 (第1図)

当該地からは柳生川を挟んで対岸にあたる牟呂地区と、南側の小浜地区は市内指折りの遺跡密集地帯である。牟呂地区では大西貝塚など縄文時代晩期の貝塚を始め、古墳時代の市杵嶋神社古墳、三ツ山古墳、牟呂王塚古墳といった首長墳、古代の寺院址および豪族居館と考えられる市道遺跡、中世の豪族居館・公文遺跡や戦国時代の牟呂城址など、各時代を通じて重要遺跡が分布している。これは牟呂地区が段丘上の比較的安定した位置にあることと、地形が本来は三河湾に延びる半島状を呈し、港としての活用が可能な入江が発達していたことに起因するのだろう。

一方、小浜地区では縄文時代中期の小浜貝塚が知られるほか、古墳時代には飾大刀が出土した磯辺王塚古墳などが



第1図 周辺遺跡分布図 (1/20,000)

ある。当地区での遺跡の集中は、恐らく牟呂地区との相乗効果であろう。

また当該地東側の段丘上には、弥生時代中期と中世の集落を中心とする橋良遺跡がある。

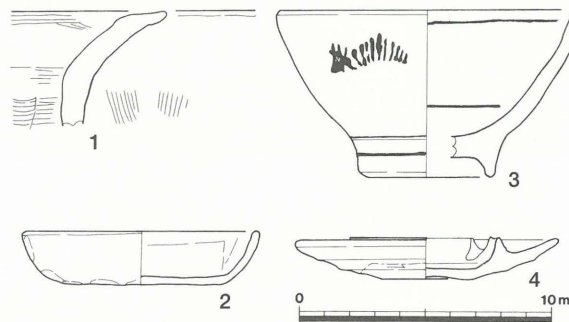
近世の絵図によって、牟呂・小浜地区を結ぶようにして延びる砂堤上には、両地区を結ぶ道が存在したことが知られている。なお、砂堤上に立地する松島集落の開村は、寛文7年(1667)の松島新田開発以降と考えられ、沖積地の字汐田付近には近世に塩田が存在したと推定されている。

参考文献 牟呂史編纂委員会 1996 『牟呂史』

3. 調査の概要 (第2・3図)

調査トレンチは25カ所設定したが、ほとんどのトレンチで明確な遺構・遺物は確認されなかった。各トレンチの基本的な層序は、大半が表土層直下が腐植土を含む砂礫層、さらに基盤層であった。H S・H 4地区は表土層下の砂礫層中に粘性を帯びた砂質土が混じり、本来は低湿地だったと判明した。ただし、MS-1 Tでは近世末の貝層が確認されたほか、その下から古墳時代の土師器の甕1点が出土した。隣接するMS-2 Tでも近世末の遺物包含層や純貝層が確認されている。以下では、MS-1~3 Tについて詳しく述べたい。

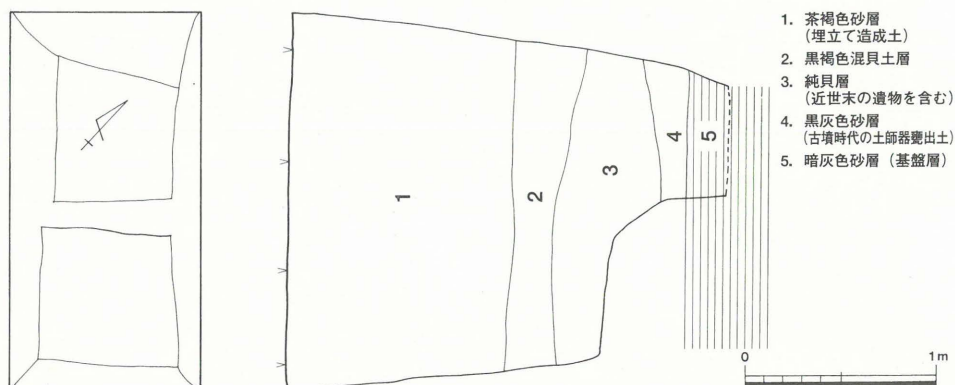
MS-1~3 Tはいずれも同一の果樹園内に、東西に並ぶ形で設けたトレンチである。ここは戦前までは窪地となった桑畑で、いずれのトレンチでも1 m前後の造成土(茶褐色砂層)が見られた。MS-1 T(第3図)では、造成土の下が近世末の遺物をわずかに含む黒褐色混貝土層、その下は近世末の遺物を多く含む純貝層であり、最下層には古墳時代の甕が出土した黒灰色砂層、そして基盤層の砂層が確認された。現地表から基盤層までの深さは2.1 m、造成土を除けば旧地表面からは0.95 mである。



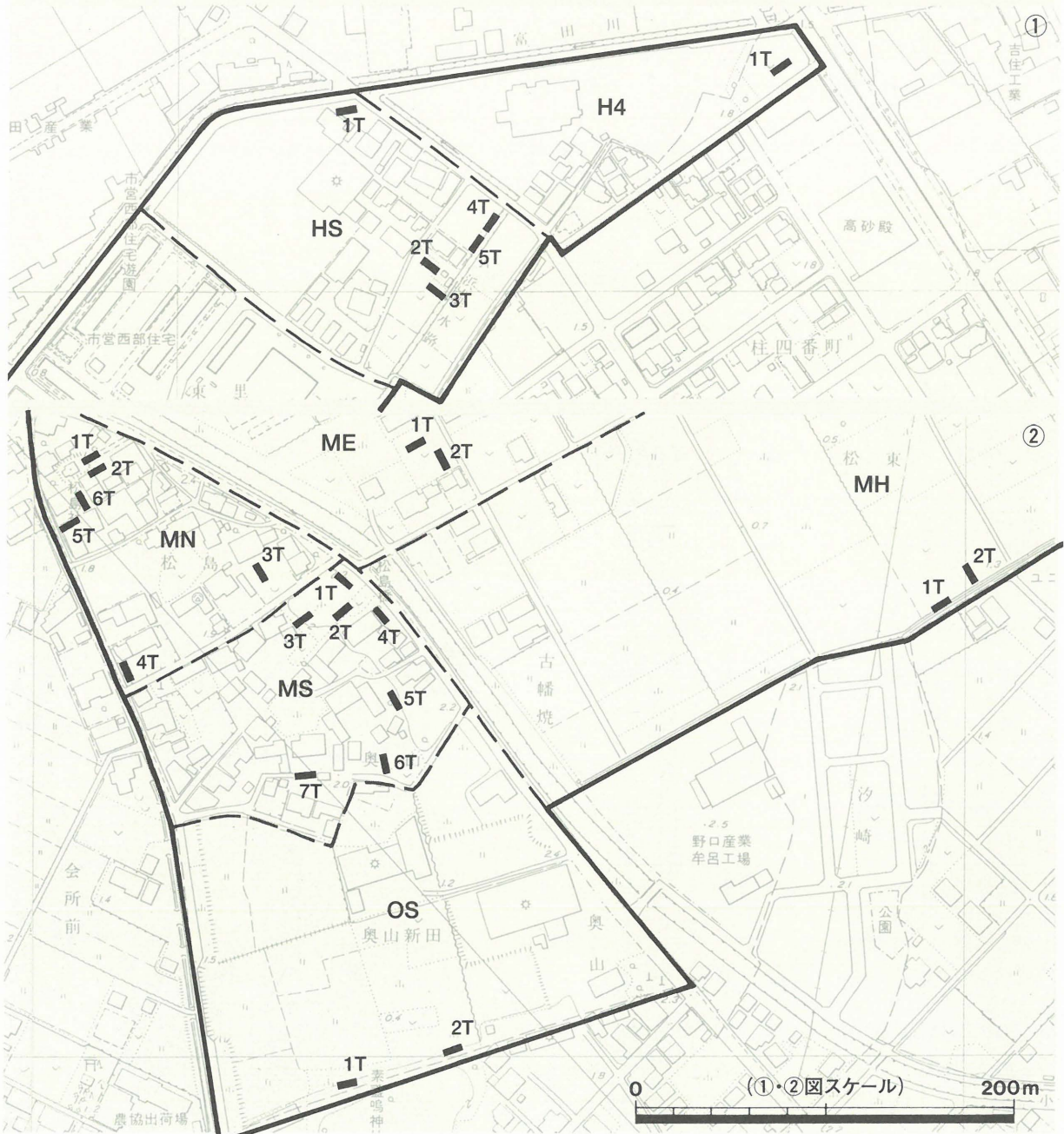
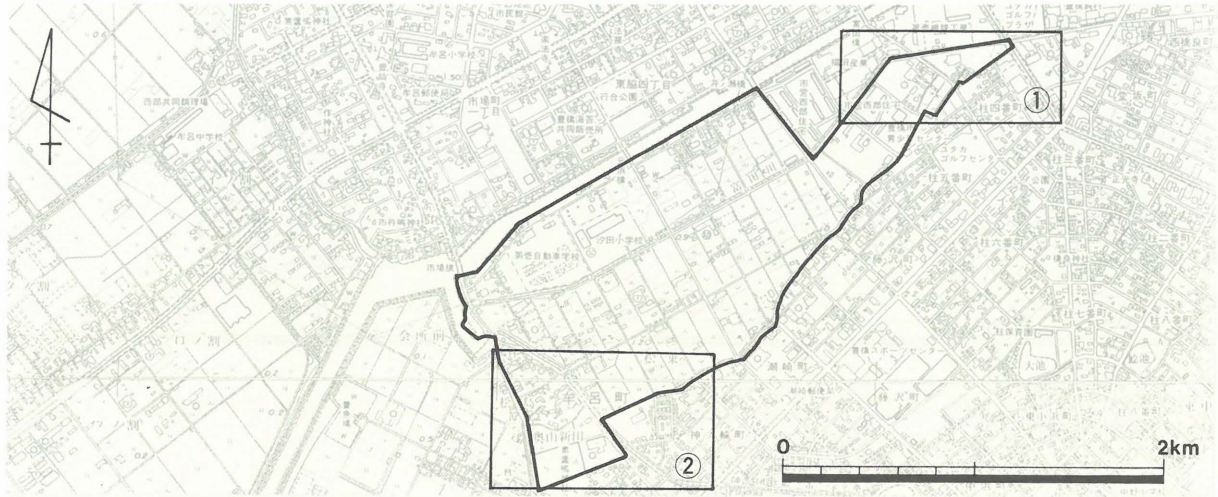
第2図 MS-1T出土遺物実測図 (1/3)

出土遺物(第2図)は1が黒灰色砂層、2~4が純貝層から出土したものである。1は古墳時代の土師器の甕で、口縁部の破片である。表面はかなり磨滅しているが、内外面ともに調整はハケメである。2は土師器の手づくね皿で、

内面調整は板ナデののちナデ、外面は底部に指頭圧痕が明瞭に残る。3・4は瀬戸美濃窯産陶器である。3は呉須絵の広東碗、



第3図 MS-1T実測図



第4図 トレンチ位置図 (1/20,000・1/3,500)

4は灯明皿で、内外面には鉄釉が見られる。2～4は19世紀前葉のものであろう。

MS-2Tでは造成土と旧地表の下に、厚さ50cmほどの近世末の遺物包含層が認められた。包含層中には貝層ブロックも含まれている。遺物はいずれも細片で、実測に耐えうるものは無かった。

MS-3Tでは造成土の下に遺物を含まない砂質土層があり、その下は基盤層であった。

基盤層の水準高は、MS-1Tが0.2m、MS-2Tが0.78m、MS-3Tが1.09mで、MS-1Tから2T・3Tへ移るに従い徐々に浅くなる。恐らく窪地の深い部分だけに、近世末の遺構・遺物が遺存するのだろう。

4. まとめ

25カ所の試掘トレンチ設けて遺跡の有無について確認した結果、大半のトレンチでは遺構・遺物が確認されず、遺跡は存在しないことが判明した。

近世末の出土品が確認されたMS-1・2Tは、窪地を利用して近世末に貝層が形成されたのだろう。また古墳時代の甕は、当時付近で何らかの生業があった中で、混在したものと思われる。

しかし近世末の出土品はMS-1・2Tだけでしか確認されておらず、古墳時代の甕が出土した黒灰色砂層はMS-1Tで確認されただけだった。愛知県埋蔵文化財保護要綱にのっとれば、この状況から、当地を埋蔵文化財包蔵地と積極的に認定することは困難である。

結論として、今回の調査対象地において、埋蔵文化財包蔵地は所在しないと思われる。

第1表 トレンチ一覧表

トレンチ名	所在地	地目	規模(m)	地表面高(m)	基盤面高(m)	備考
MN-1T	牟呂町松島	境内地	2×1	2.44	1.84	
MN-2T	牟呂町松島	境内地	2×1	2.7	1.3	
MN-3T	牟呂町松島	宅地	2×1	1.58	1.3	
MN-4T	牟呂町松島	宅地	2×1			図面未作成
MN-5T	牟呂町松島	宅地	2×1	1.26	0.34	攪乱あり
MN-6T	牟呂町松島	宅地	2×1	1.12	0.83	
MS-1T	牟呂町松島	畑	2×1	2.3	0.2	古墳時代の土師器甕、近世末の貝層
MS-2T	牟呂町松島	畑	2×1	2.32	0.78	近世末の遺物包含層
MS-3T	牟呂町松島	畑	2×1	2.34	1.09	
MS-4T	牟呂町松島	宅地	2×1	2.31	1.73	
MS-5T	牟呂町松島	宅地	2×1	1.02	0.47	
MS-6T	牟呂町奥山	宅地	2×1	0.94	0.74	
MS-7T	牟呂町奥山	畑	2×1	1.49	0.57	
OS-1T	牟呂町奥山新田	田	2×1	-0.35	-0.76	湧水が著しい。
OS-2T	牟呂町奥山新田	田	2×1	-0.35	-0.78	湧水が著しい。
ME-1T	牟呂町松島東	雑種地	2×1	0.55	-0.03	湧水が著しい。
ME-2T	牟呂町松島東	雑種地	2×1	1.16	0.72	
MH-1T	牟呂町松東	畑	2×1	0.99	0.69	湧水が著しい。
MH-2T	牟呂町松東	畑	2×1	1.18	0.48	湧水が著しい。
HS-1T	牟呂町東里	宅地	2×1	0.98	0.16	元低湿地
HS-2T	牟呂町東里	畑	2×1	1.36	0.46	元低湿地
HS-3T	牟呂町東里	畑	2×1	1.27	0.61	元低湿地
HS-4T	牟呂町東里	畑	2×1	1.61	0.63	元低湿地
HS-5T	牟呂町東里	畑	2×1	1.86	0.6	元低湿地
H4-1T	柱四番町	畑	2×1	1.72	1.12	元低湿地

報 告 書 抄 録

ふ り が な	なぎよんごうふん やぎゅうがわなんぶちくしくつちようさ							
書 名	奈木4号墳 柳生川南部地区試掘調査							
副 書 名								
巻 次								
シ リ ー ズ 名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第56集							
編 著 者 名	岩瀬彰利、岩原剛							
編 集 機 関	豊橋市教育委員会							
所 在 地	〒440-0801 愛知県豊橋市今橋町3番地の1 豊橋市美術博物館 TEL 0532-51-2879							
発 行 年	西暦2001年3月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 。 。 。	南緯 。 。 。	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なぎよんごうふん 奈木4号墳	とよはしすせちよう 豊橋市嵩山町 あざなぎはちばんち 字奈木8番地	23201	79201	34度 48分 60秒	137度 27分 60秒	20000918～ 20000927	50m ²	個人住宅 新築工事
やぎゅうがわなんぶ 柳生川南部 ちくしくつ 地区試掘	とよはしむろちよう 豊橋市牟呂町 あざまつしま 字松島ほか	23201		34度 44分 30秒	137度 21分 50秒	20000904～ 20000928	50m ²	区画整理 事業
収容遺跡後	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
奈木4号墳	古墳	弥生 古墳 中世 近世	竪穴住居 周溝	条痕文土器、扁平片刃 磨製石斧 須恵器 中世陶器、土師器 近世陶器		水神平式期の竪穴 住居 古墳は6世紀中葉 の推定直径16.4m の円墳		
柳生川南部 地区試掘		古墳・近世		土師器、近世陶器		遺跡は存在してい ない		

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第56集

奈 木 4 号 墳
柳生川南部地区試掘調査

2001年3月30日

発行 豊橋市教育委員会©
教育部美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3番地の1

印刷 共和印刷株式会社

写真図版



1. 奈木4号墳上空写真



2. 奈木4号墳遠景 (南から)



1. 奈木4号墳近景（南から）



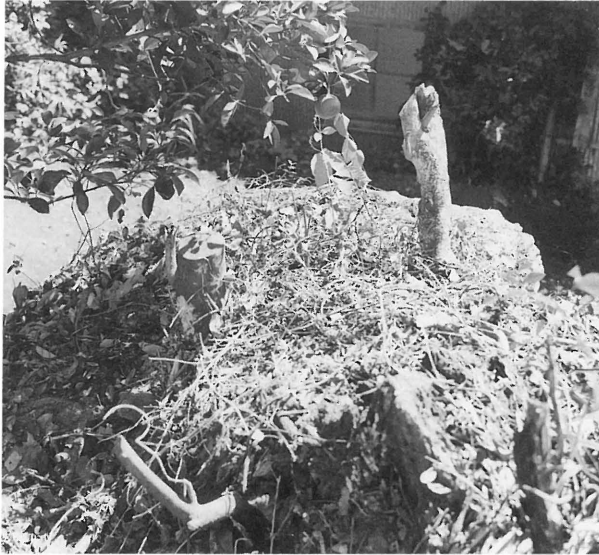
2. 墳丘残存部（南上方から）



1. 墳丘残存部（南から）



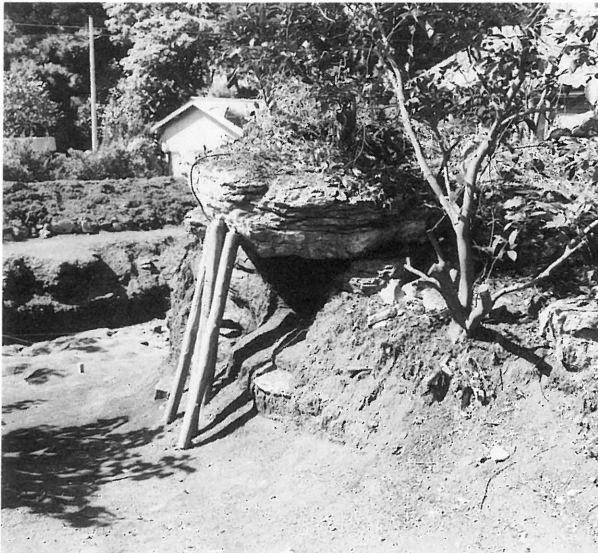
2. 墳丘残存部（北から）



1. 墳頂部 (東から)



2. 奥壁が撤去された横穴式石室 (東から)



3. 奥壁が撤去された横穴式石室 (北東から)



4. 露出した天井石 (東から)



5. 積み上げられた天井石 (南東から)



6. 放置された奥壁 (東から)



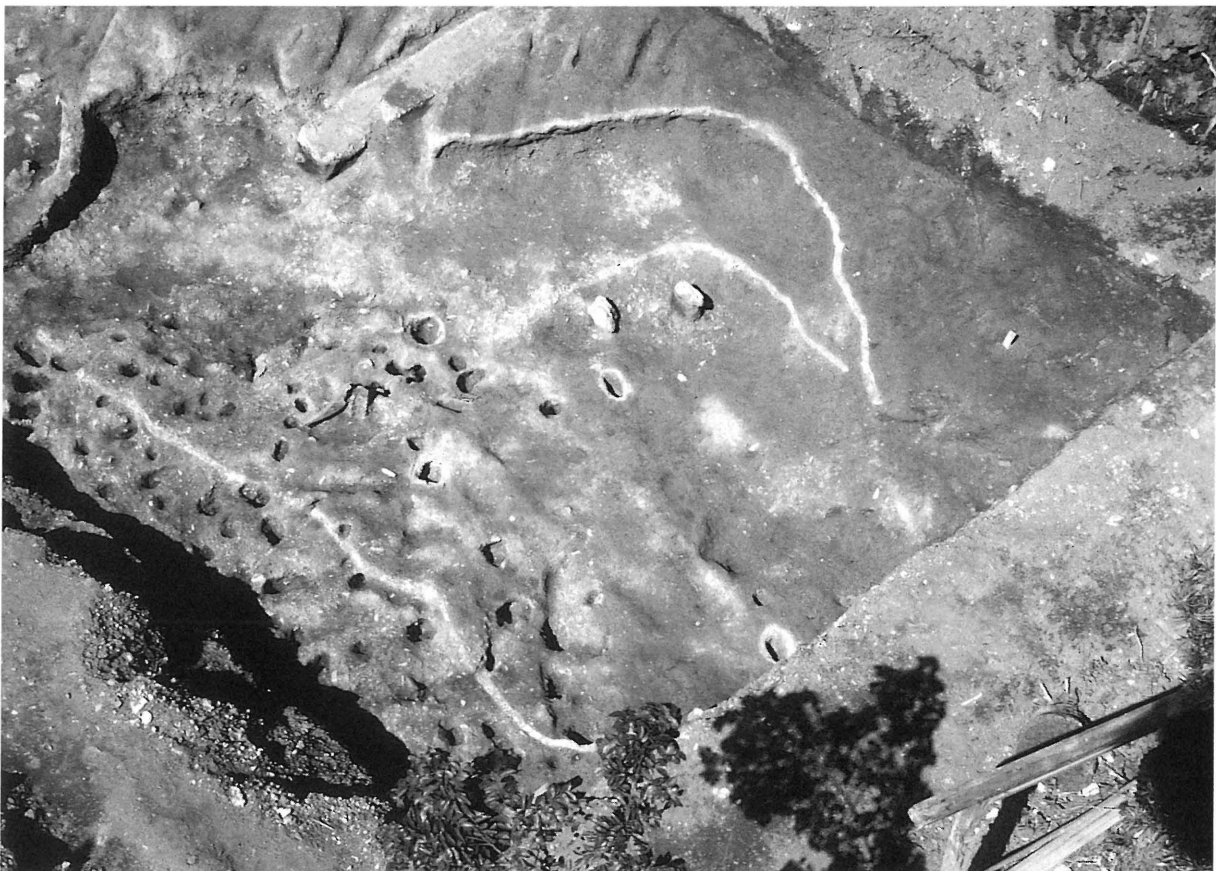
1. 調査区全景 (南から)



2. 調査区全景 (南から)



1. SB-1・2全景（南西から）



2. SB-1・2全景（南東から）



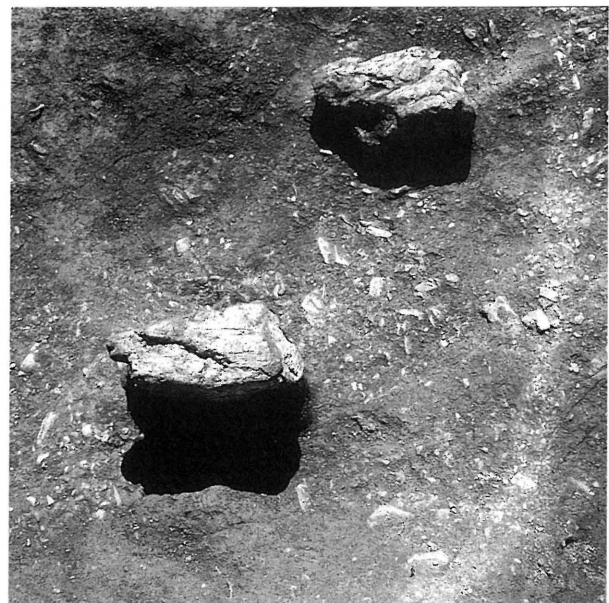
1. SB-1・2ベルト部 (南西から)



2. SB-1・2の切り合い (南西から)

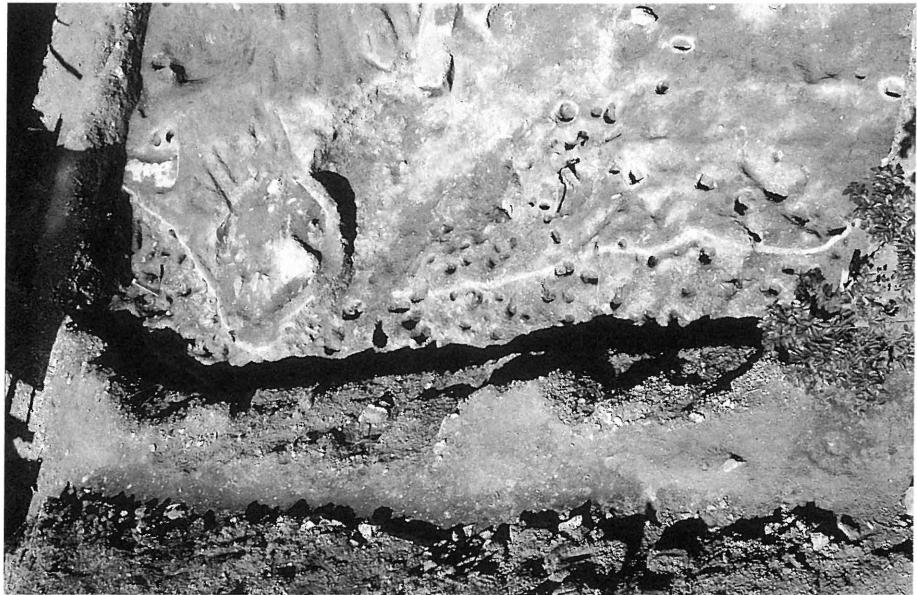


3. 断面で確認されたSB-2・P1 (北から)

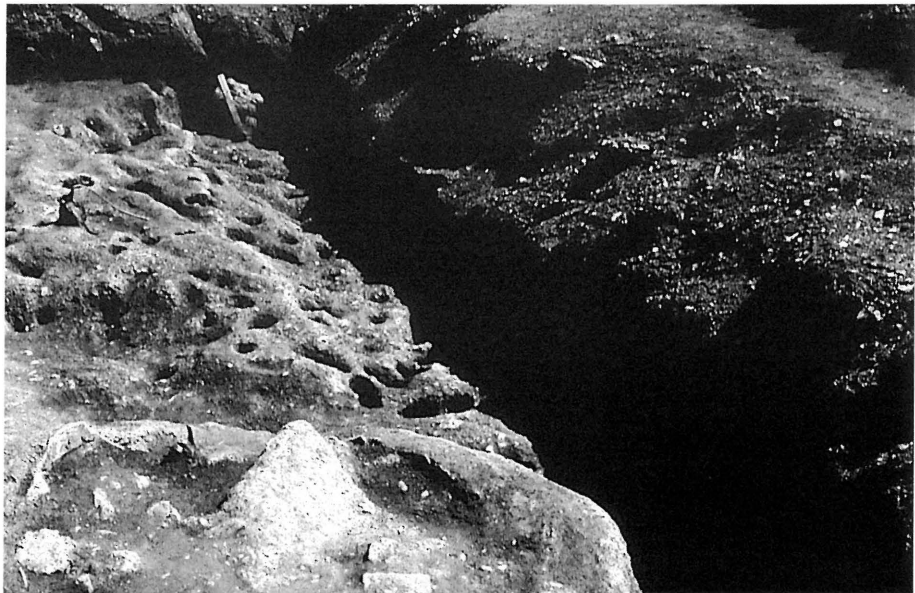


4. 炉縁石出土状況 (北から)

1. 周溝全景 (南から)



2. 周溝全景 (西から)



3. 周溝全景 (東から)





1. 周溝西端遺物出土状況（北西から）



2. 周溝西端遺物出土状況（南東から）



3. 周溝東端遺物出土状況（南西から）



4. 周溝東端遺物出土状況（東から）



1. 調査のようす



2. 奈木1号墳全景（南から）



3. 奈木1号墳石室開口部（南から）



4. 奈木1号墳石室内部（南から）



5. 奈木3号墳奥壁（南から）



6. 奈木5号墳全景（北から）



7. 奈木6号墳全景（北西から）



8. 奈木8号墳全景（南から）



1. 奈木9号墳全景（南から）



2. 奈木10号墳全景（南から）



3. 奈木10号墳羨門（南から）



4. 奈木11号墳全景（南西から）



5. 奈木12号墳全景（南から）



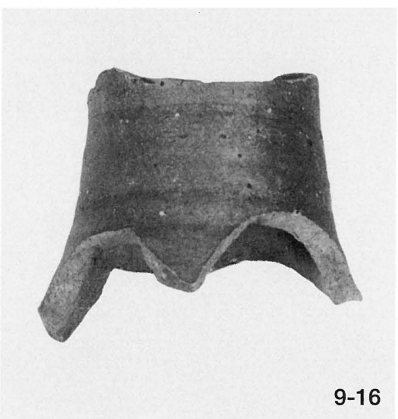
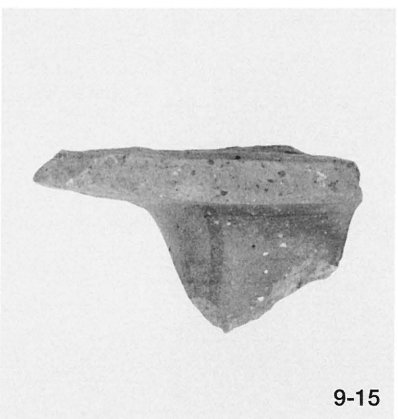
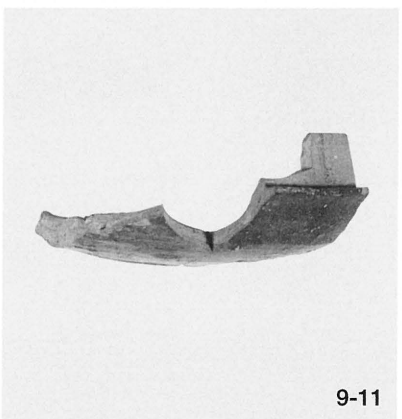
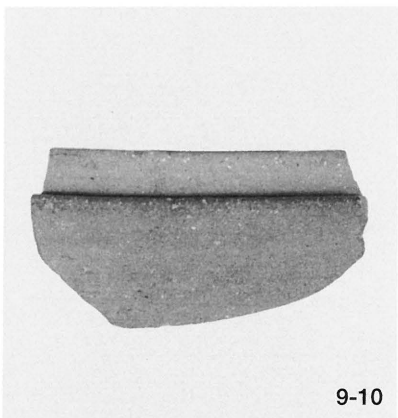
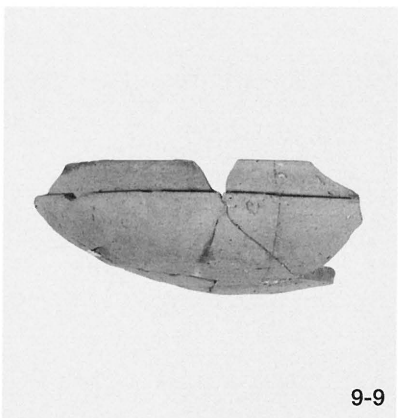
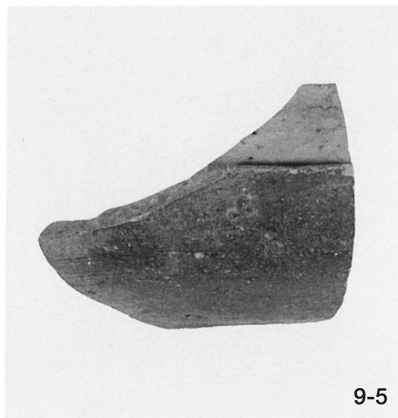
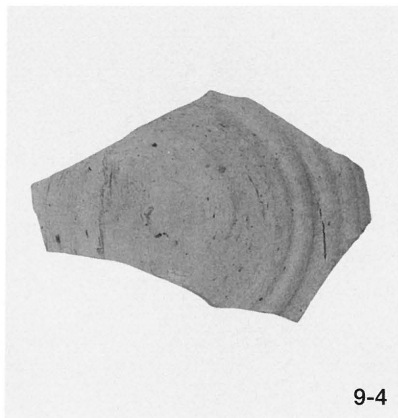
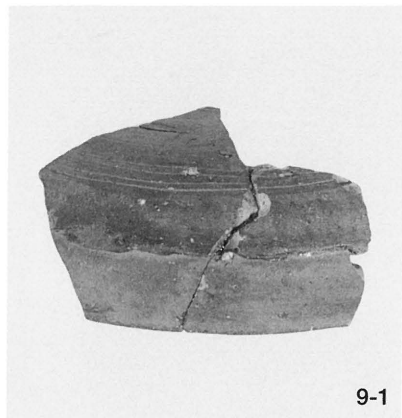
6. 奈木13号墳全景（南から）

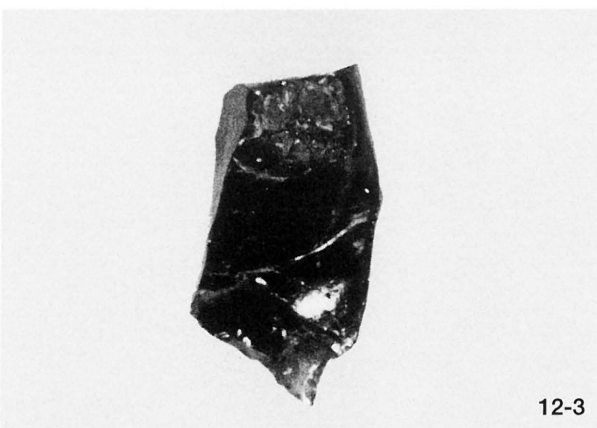
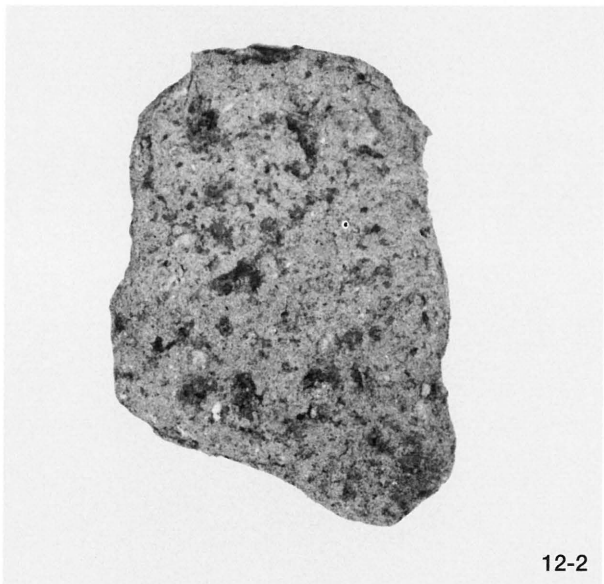
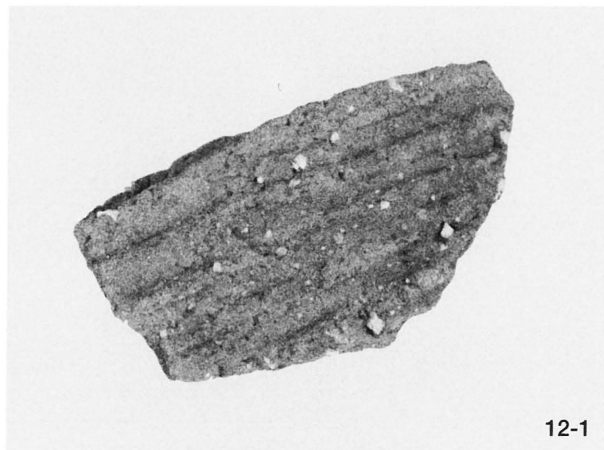


7. 奈木14号墳全景（南から）

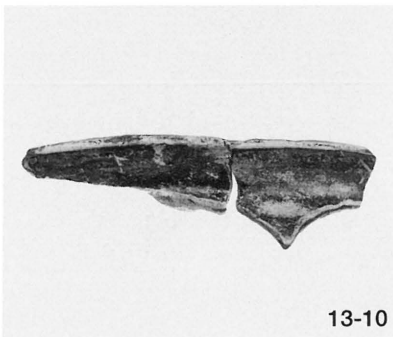
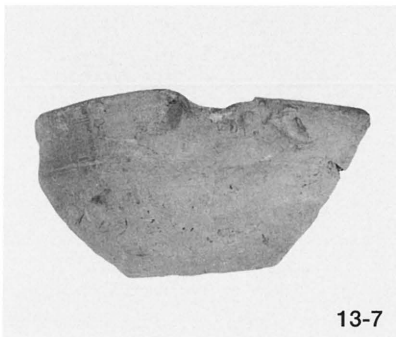
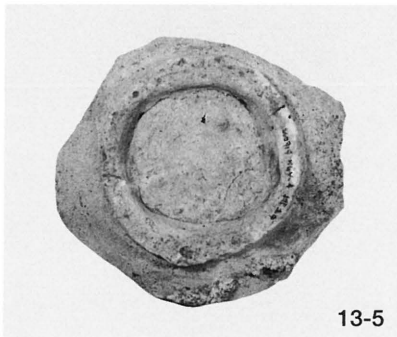
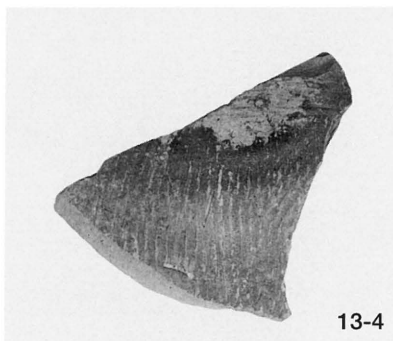


8. 奈木15号墳全景（西から）





1. SB-2及びSB-2内攪乱出土遺物



2. 表土出土遺物



1. MN-2T (東から)



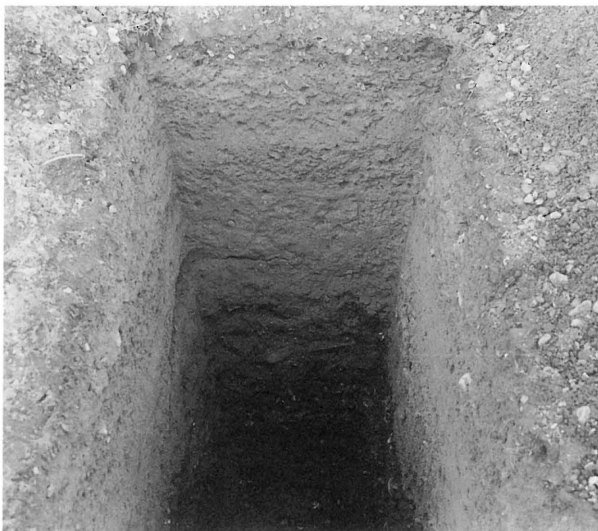
2. MN-4T (北から)



3. MN-5T (北東から)



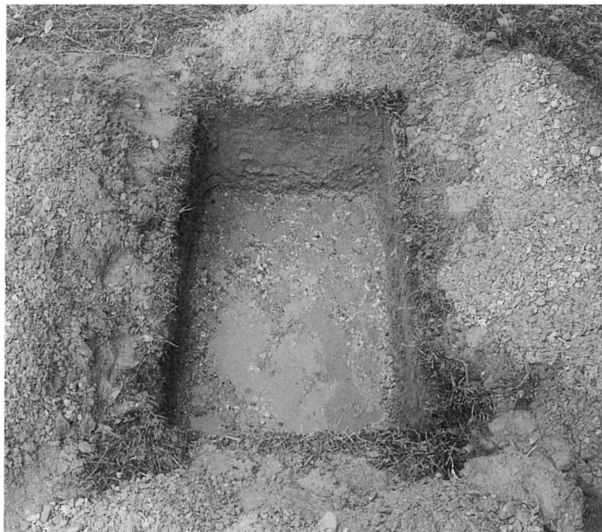
4. MS-1T① (西から)



5. MS-1T② (南西から)



6. MS-7T (北から)



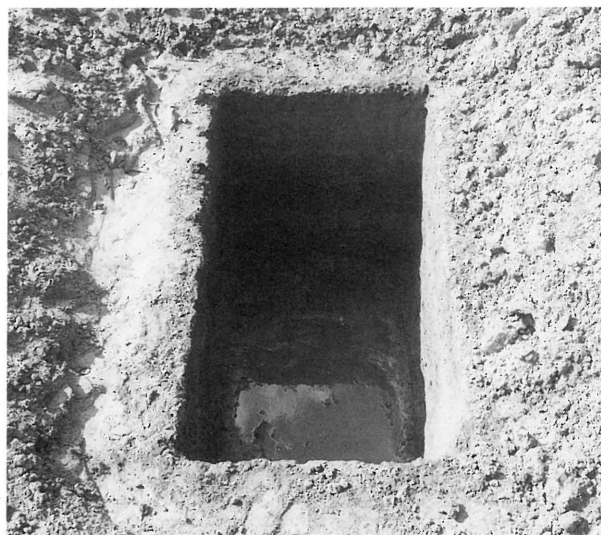
1. OS-1T (西から)



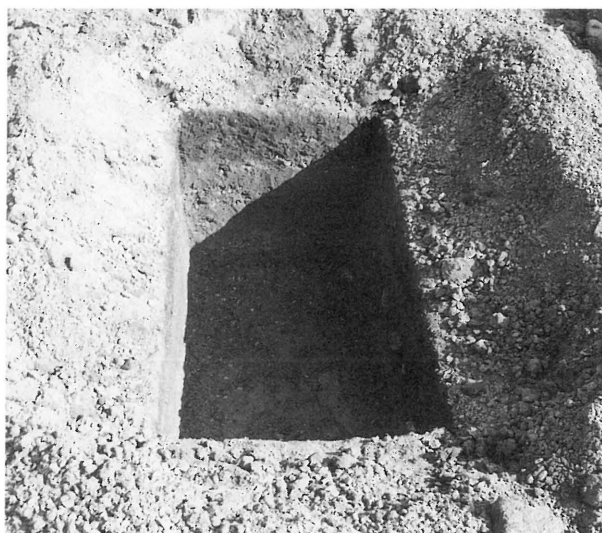
2. ME-2T (北から)



3. MH-2T (北から)



4. HS-2T (南から)



5. HS-3T (北から)



6. H4-1T (西から)